
あらいぶ ～ぼくらは知性に恋をする～

たま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あらいぶ くぼくらは知性に恋をする

【Nコード】

N4470Y

【作者名】

たま

【あらすじ】

高校入学からしばらく。幼馴染と一緒に始めた体感ゲーム。

ノンプレイヤーキャラクター

その中で出会ったNPC達は現実の人間達と比べても遜色ないほどの感情と表情を持っていた。

ディスプレイに入れないかと頭をひねっていたのはもう過去のコト。Hentai大国ジャパンで暮らす高校生がゲームキャラにがつつり感情移入しちゃう話です。

その1

未開の大地に到達した彼らが遭遇したのは異形の者達。

体毛の少ない緑の肌に下顎から生えた口内に収まり切らない二本の牙。尖った耳に、深く窪んだ瞳。

彼らは伝承や物語の中に登場する「小鬼」に姿が酷似していた事から『ゴブリン』と呼称される事となった。

独自の言語すら用いる彼らの知能の高さから、人間達は当初「ヨイ関係」を築こうと接近した。

しかし、それは手痛い洗礼をもって返される事となる。

「彼の蛮族共は、ごく友好的に接触を試みた我が同胞達を家畜の様に扱った」

以来、人間とゴブリンの戦いは激化の一途を辿った。

ある戦場にて。

装備と質で勝り何とか戦線を保っていた人間達は次第にゴブリン達の数に押されていく。

まさに今、彼らは援軍を必要としていた。

「ぐふふ。このクエスト、どう？」

俺の前の席でタブレット型の端末を指でいじっていた佐和が言った。

ここは未開の大地でもなければ、援軍を求める四面楚歌の部隊でもない。

ごく一般的な学校の教室内だ。体育の後という事もあって俺も佐和も、体育着にハーフパンツ姿だった。

入学から約一ヶ月。目新しいコトだらけの高校生活とは別に俺達

はこの春、もう一つの旅をはじめたんだ。

「なんでだよ！　なんでなんだよ！　もっと平和なのにしてくれよ！　お花摘みとか無いのかよ！」

「……ヨシムネ……、勇ましいの、名前だけ」

「お前は、おしとやかなのは名前だけだなオイ！」

佐和は肩にかかるほどの長さの艶やかな黒髪を手首に掛けてあつた髪留め用のゴムバンドで縛り上げてポニーテールを作った。正直うなじがイロツポイ。昔からずっと見てるけど何度見ても慣れやしない。

そのまま佐和は横に移動してきて俺の椅子に無理やり座ろうとする。狭い。仕方無いから半分席を譲ってやると、佐和は当然のようにそこに腰をおろした。だから一人掛けの椅子に二人は狭いつて。そんな事もお構い無しに肩をぴったりとくつつけてくる。手にしたタブレット型の端末を俺の鼻先まで突き出して、自分も覗き込む様に頭を乗り出す。

「大丈夫だって、ほら。『Accept』押して。パス、入れて」
佐和がとんとと指で叩く端末には、クエストのおおまかなバツクグラウンド、報酬、適正レベルが表示されている。

表示されているレベルは『10』。……。

報酬はイイが正直無理だから。「奥さん、ココ、ハンコね」みたいな物言いはやめてくれ。取りあえず顔をぶいとそらして無言の反抗。

「むー！　こら！　見イ！」

無視だ。俺はこんな危ないクエストよりお花摘みしたいんだ。

「あー！　リミット！　この花摘み野郎、お前のせいだー！」

なんだろう……。すごい侮辱を受けている気がする。しかし、意見は通したぞ。端末に表示されているクエスト詳細には赤い文字で『Limit』と表示が追加されていた。

このクエストの参加人数の上限に到達した合図だ。それでもう俺達が【ゴブリン退治】をする事は無い。受注に失敗した俺達がクエ

スタート開始NPCのところへ行ったところで、にべも無いだろう。後は他のプレイヤー達に任せておけばいい。

VRMMO「エレメンタル・ワールド・オンライン」、通称『EWO』。各地のゲームセンターやら、専用の施設に置かれている大型の筐体を使い自律NPCの生活する世界へと潜る体感ゲーム。今世紀に入って急速に進化を遂げたネットワークゲームの新しいカタチだ。

世界中が熱狂し、ゲーム内は毎日がお祭り状態で大混雑。

サービスインから一年が経った今でもアカウント数の増加は止まらない。

ハマり過ぎて現実世界での生活を疎かにする人も珍しくはない。みるに見兼ねたご家族が「こんなの、麻薬とかわりやしないだろ！」と制作会社を訴える団体を立ち上げた事も記憶に新しい。

批判するにも内容が知らねば、と、試しにプレイした弁護士も、ご家族も軒並みハマってみんなで仲良くゲーム攻略に精をだしているのはもつと記憶に新しい。

「このヘタレこしめけ花摘み野郎ー！」

「ムチャクチャ苦しいのです、そろそろ勘弁してもらえませんか、さまあ」

狙いのクエストを逃した佐和が俺の首を締めている。締めて揺さぶっている。いくら締めても、もう取り返しはつかぬのだ。

「どうするの、今日のクエスト！」

「中で適当に（戦闘系以外で）探せばいいじゃん……」

佐和はタブレット端末に専用のアプリをダウンロードして使っている。

このアプリ、中々に便利。

アプリに『EWO』のアカウントを同期しておけば、ゲームの進

捗状況、レベル、各NPC勢力との友好度などから、現在そのアカウントで受注可能なクエスト情報を知らせてくれるというシロモノだ。しかもログイン前に外部からクエストを予約する事ができる。

全てのクエストには受注可能人数制限が設けられている。一度発生したクエストは、一定時間経過しなければ再び発生しないため、報酬のいいクエストは我先に……と、正にシユンサツ。

年中ログインしている人間には必要無いかもしれないが、一般人が効率良くゲームを進めるためには、必須のアプリだ。

まあ、活用できていない俺たちには真珠だけだ。

佐和とグループを組みはじめたのは二週間前。

その間に知ったのは、こいつは無謀の者という事だ！

二週間前というのは俺と佐和がこのゲームを始めた時期でもある。プレイ時間とレベルを考えれば、いわゆる初心者と呼ばれる位置にいる。

俺は説明書を熟読し、ゆっくりとレベルを上げ、着実にスキルアップしていき、石橋を叩いて渡るが如く圧勝をもってエリアを闊歩するスタイルでこれまでのゲームをプレイしてきた。

『EWO』に、これまでのスタイルが通用するかはわからなかったけど、できる事ならばそうして進めたいと思っていたのだが……。

佐和は報酬のイイ戦闘系のクエストを片っ端から請けた。

格上のクエストだろうが、なんだろうが片っ端にだ。

仮想現実の中とはいえ、顔面目掛けて振り下ろされる刃物の恐ろしさを知ったのもこの時期だ。というか、初日だ。

ゲーム内で死亡したプレイヤーは、ペナルティを支払う事で復活する事ができるらしい。高レベルになればなるほどにそのペナルティは高くなっていく。

ゲームと深くリンクしてしまったプレイヤーはその分支払うモノが多くなるという事らしいが、この説明文コワイよ。

システムで設定されているペナルティとは別に、死の光景が強烈に焼きつき、トラウマが残って再度ログインする事すら困難に

なつた例もあるという。そうなつてしまつては、ゲームオーバーどころか、現実での生活にも支障をきたす。

それでも新規参入者が耐えないのはもっとコワイかもしれない。とにかく死ぬ回数は少ない方がいいだろう。死なないに越した事はない、……と、思っていたのだが。

安全なクエストしか請けない俺に痺れをきらした佐和は先週タブレット端末を購入。内緒で野蛮なクエストを事前受注しようとしてやがった。

だから！ 俺は！

「ちくしょう、アカウントの同期、直せよー！」

佐和が寝てる間にヤツのアプリの同期、俺のアカウントに設定してやった。アプリに干渉するためのロック機能も設定したから、削除も再インストールもできない。最近のには指紋認証とかすごい機能ついてんだ。油断したな。

これで佐和が俺の目の届かない所で勝手に危ないクエストを受注する事はできない。佐和が請けたクエストはどうせ俺も一緒にやる事になるんだ。少しでもリスクは減らすべきだろう？

問題は一つ。未だに俺の首は締められたままだという事だ。ゲーム内での死を心配する前に、リアルな肉体を心配するべきだった。

「ぐるじい……」

もうダメ……。

「コラ」

意識途切れそうだった俺の目の前でゴスツと鈍い音がして、佐和の頭に縦にされた教科書が突き刺さった。ついでに俺の首を締めていた手も外れた。

「予鈴鳴ってるぞ。いつまでもゲームのアプリなんていじってるんじゃない」

教師の一撃に佐和が涙目になりながら「……ふあい」と返事をし、自分の席に戻っていく。助かった。

次の時間は数学だ。俺は知らなかった。本当の地獄はここからだったんだ。

黒板に目をやる度、ちらっちら佐和のうなじが視界にはいる。

たまに後ろを振り返ってニヤニヤしてきたり、「ふう」とか呟きながら首すじを撫でたりしてきているあたりワザとだろ。さっきの復讐のつもりかよ。そんなもんが俺に通用すると思ってるのか、コイツは。

そういえば……、昨日、村で新しい薬草見つけたな。しかも二週間毎日通っている酒場の入り口の真ん前でだ。

ずっと村の中で生活してたんだ。これまで見逃していた、なんてハズがない。

ちようど、目の前で小さく揺れる佐和のポニーテールみたいな力タチのー、違う。

昨日今日急に発生したとは考えにくいよな。もしかして、これが「スキルが上がる」って事なのかな。

俺がああ草に気づけるようになったんだ。きつと。

「ふう」

そうそう、また、体育の後だけあって、ちよっぴり汗ばんでたりして、肌も赤みがかってたりもして、これがまた、その……。

「……香月、ヨシムネの目が怖いんだ。本当に。誘惑するのはやめてやってくれ……」

「はい？ 誘惑って。やだなセンセエ、ヨシムネ、オトコだよ？」

「あー、そうだったな。……ん？ あれ？」

首を傾げる数学教師だったが、ま、それはともかく。

これからもずっと組んで行くんだ。手堅く行こうよ。なあ、佐和。

「……ヨシムネ、イタイ……」

目の前で揺れていた佐和のポニーテールを無意識にぐいぐい引っ張りながらそんな風に俺は思ったんだ。

その2

授業も終わり放課後だ。体育着も着替えて同じブレザー姿の俺と佐和。

「佐和、イイカゲン今後の方針を決めようじゃないか」

俺は『EWO』にログインするために、筐体のある施設に向かう途中、作戦会議を

「だから言ってるじゃん。強いのが、エライの！」

……したかった。

わかってた。そう言われるんじゃないかって思ってた。

けどホント。さっきも言ったんだけど「イイカゲン」なんだ。

「じゃあさ、強いのがエライとしてだな。二週間プレイして、お前レベルいくつになったと思ってんだよ」

「……ちゅう」

佐和がクチビルをタコのように尖らせて答えた。TWOね。とう。

『EWO』を始めて二週間。俺たちのレベルは「2」までしか上がっていなかった。ザコだ。学校が終わった後、毎日少ししかログインできない、というのを差し引いても他のプレイヤーより格段に遅いレベリング速度。

ゆっくりじつくりは望むところなので別に構わないんだが、違うんだ。

簡単に言えば成長できていない。……無駄に時間だけを費やしているってコトだ。

これには深いワケがあった。

開始地点に用意されていた「チュートリアルNPC」。

こいつのくれるクエストを順番にクリアしていけば、ゲーム内のルールや、施設の説明、メニューの使い方、戦闘、採取、生産のやり方、各種序盤の装備品・消耗品の提供等、一通り遊べる程度まで

手助けをしてくれる、はずだった。

初ログイン。それは高校に入学し、一ヶ月ほど経ったある休日。新しい生活のドタバタにかまけて、出しっぱなしだった中学校時代の学生服。

3年間着続けた学生服は、いつの間にかすっかり思い出の中のモノになってしまっていたようだ。少しはアダルトになったってコトかな。

もう戻れない中学生時代を懐かしみながら学生服をしまおうとしたその時に、佐和が言った。

「どうせなら最後にその服着て、アソビいこ？」

こうして最後の思い出にと、俺と佐和は学生服にセーラー服で遊びに出るコトにしたんだ。

丸一日あっちこっち遊びまわり、ゴハンも食べて、そろそろ帰ろうかって時に、ふと目にした『EWO』のポスター。

元々俺も佐和もゲームは好きな方だ。ウワサだけは耳にしていた『EWO』を試しにプレイしてみようというコトになり……、アミューズメント施設「OO」へと足を運んだ。

各地で高い人気の『EWO』だったが、ログインには大型の筐体が必要だ。

田舎のゲームセンターにも今や数台は当たり前らしいが、順番待ちがキツいとか。

幸いうちの近所にある「OO」は、県内でも最大数の筐体が並んでいる。

五階建てのビルの中、三層を占有している『EWO』の筐体。その数、二百台。壮観だ。まだまだ増える気配すらうかがえる。

おかげで順番待ちに足止めをくう事も無くすんなり開始。

まずはデータカードを購入するために各種手続き。筐体に付属しているヘッドマウントディスプレイを装着し、利用規約に同意。アカウント名、本名に、支払い方法、カード持ち主の住所、使用する

キャラの名前を入力して、その後、顔写真を撮影し、パスワードも二種類設定。

設定変更のためのパスワード、それからカードを紛失した際に使う再発行用のパスワードだ。

登録に5分ほど待たされたのち、取り出し口からカードが出てくる。

データカードは名前と顔写真が表示されている手のひら大のカードだった。

説明によると、このデータカードさえあればこの筐体を使っても同じキャラで「潜れる」らしい。

それからヘッドマウントディスプレイに表示されたメッセージに従い、筐体内の座席に横になる事10分強。ここまでのログイン準備に合計20分ほどか。これは初回のみらしい。次回からはもっと円滑なログインが可能になるとか。

外見をトレースし終えた筐体は『EWO』の世界にいいよ俺を引きずり込む。

初めての経験だ。タマシイを引っ張られて、持ち上げられて、そのまんまぶん投げられたのに気持ち良かった感じ。言葉にし難い。

ログインし終えた俺は森に居た。長閑な森だ。小鳥のさえずりと川のせせらぎが聞こえる。遠くには子鹿がこちらを伺っているのも見える。

正直、拍子抜けだった。

ファンタジー世界という事前情報があったので、それこそいきなりスライムやらがウロついているものだと思った。これはあれか。初戦闘まで二時間かかるコースか。

すっかり目の前の風景に気を取られていたが、あたりを見回しているうちに、森の奥に小さな教会があるのに気付いた。木造、白いペンキで塗られた小さな教会だ。

他にめぼしい建物も見当たらない。きつとあそこに行くのがファ

リストステップなんだろう。

佐和を待つてから向かうとしよう。その間に試してみたい事ははたくさんあるし。

取り合えずメニューを呼び出してみる。

「……おお……」

思わず嘆息。考えるだけで目の前にメニューリストが表示された。AボタンもBボタンも要らないなんて……。

L v 1 ヨシムネ 【Health】 150 / 150 【Ma
na】 0 / 0 【Jpn】

・ Status

・ Skill

・ Quest

・ Faction

・ Group

項目少なっ！

でもアイテムやら装備はメニューから選択しないのは当然か。

ポーションとかは飲めばそのまま【使う】だし、武器だつて持てばそれが【装備】だもんな。

ヘルスつてのが生命力でマナが魔法力か。ゼロで。……ゼロで……。

ステータスつてのは能力値だよな。身体性能が数値化されるのか。……初期値に差はあるのかな……。後で佐和と比べてみよう。

人間性能、負けてたら今まで生きてきた16年、否定されるみたいで嫌だな……。

スキルつてのはなんだろう。やった事あるゲームだと、魔法とか、必殺技とか固有名詞がココに属する場合も、剣とか、回避とか、それを扱う巧さを数値化してる場合もあったな。

表示させてみたけど空白になってるから、どっちなのか区別がつ

かない。けど、これもそのうち解るか。

クエストつてのはー……。

「お待たせ、ヨシムネ」

佐和だ。外にいる時と全く同じ姿の佐和が俺の前に現れた。自分のは気にしなかったけど、服装も一緒だ。

あの筐体、やっぱり外見完璧にトレースするんだな。

……佐和みたいな美形は得だよ……。きっとプレイヤー間でのやりとりも円滑になったりするんだろうなあ。初期値比べなくても負けてる気がしてきた。

「すごいね、ホントにヨシムネだ」

佐和が確認するように俺の顔をぺたぺた触ってくる。

信じられない事にくすぐったかった。これにはぞっとした。

「痛覚」はどうなってるんだ。この先、間違いなく起こる魔物との戦闘の最中、痛みを感じるとなると、ステータスの数値化なんて意味ないんじゃないだろうか。

一撃食らっただけで、のたうちまわって戦うどころじゃなくなるのでは。

それどころか腕が切り落とされたりとか、首がはねられたりとか、そんな状況になった時、俺たちはまともな状態でログアウトできるのか？ 痛みで発狂して、そのまま……。

「ソオイ！」

気になって気になって仕方なかった俺はデコピンしてみた。自分に試して痛いといやだから、佐和に。

びちん！

「いったああああい！」

「マジかー！？ 痛いの！？ 痛いの！？ どんくらい痛いんだよー！」

「こんくらいだバカー！」

涙目の佐和は平手で俺の頬を打ち抜いた。手加減無しだ。以前二、三十回くらった事があるが俺のデコピンなんて比べ物にならない攻

撃力だぞこれは。

思わず目を瞑った俺に襲いくる痛み！

「……痛くないぞ」

「えっ、うそ!？」

信じられない、といった面持ちの佐和が俺の頬を確認するように撫でた。

「これは、くすぐったい……」

佐和は考えるように俺を見つめたまま頬をしばらくなでていたが、何かを思いついたのか、突然につこりと微笑んだ。

「えへ」

イヤな予感。急いで逃げようとした俺の胸ぐらを掴んで固定。しまった。離脱失敗だ。

「あだだだだ！」

佐和は俺の頬をきゅっとつねりあげた。バカな。平手より攻撃力は低いハズなのに、イタイぞ！

「イタイの？ イタイの？ じゃあ、これは？ ねえ、ほら。答えて？」

コイツ、どんどん力込めてやがる！ 痛みが増す、はずだったのに逆に小さくなっていく。

「あれ？ 痛くなくなってきたぞ」

「一定以上の感覚をカットするみたいだね。……多分、これくらいなら……」

「いでででで！」

ツネる力を微調整して俺に通じる範囲を割り出したようだ。

「よし、完璧」

「開幕からそんなのマスターしてどうすんだよ！」

まあひとまずこれで心配事が一つ減ったかな。よく考えればそうだよ。痛みも直結だったらそっちも有名なはずだよな。究極のマゾ御用達ゲームとかっていう風に。

「で、あの建物行けばいいのかな？」

散々俺のほつぺたツネりまくった佐和がすつきりとした面持ちで森の中の教会を指差した。

「まあ、他にないし、行ってみるか、の前に」

俺はもう一度メニューを開いて……。

あ。【Health】の値が少し減ってる。148/150だ。カットした痛みの方だけこの値が減っていくんだな。叩かれた頼つぺたも腫れてないしダメージはキャラグラフィックに影響しないみたいだ。腕とか切り落とされる様な攻撃でも【Health】が減少するだけで、腕はつながったままになるのかな。よくわからんがそんなコワイ攻撃喰らわないにかぎるな。

そこら辺もゲームを進めて行けばイヤでも知るコトになるだろうし、まあいいや。取り合えず俺は一番下の項目「Group」を選択した。

それから……。どうすればいいんだ？

んーと、佐和とグループ組みたいんですけどー。頭の中で念じてみる。

「あつ」

声をあげた佐和の前にポップアップウィンドウが出現。

『ヨシムネ』has invited you to join
a group. (ヨシムネからのラヴコールですよ)

・Accept (これからヨロシクお願いいたします)

・Decline (一人寂しくウーロン茶にでもつかってろ)

上が受諾で下が拒否らしい。ものすごい早さでAcceptを選択する佐和。

「きちんと読んでから返事しろよ！ お前『ヨシムネ』って出ただけで無条件同意してるだろ！」

「ちゃんと聞こえたもん！ 佐和とグループ組みたいって思ったでしょ！？」

へーえ、ポップアップウィンドウとは別に直接頭に届くのか。ささやきチャットってやつなのかな。どれ。

佐和、ばーか。

ぎぎぎ、完璧な力加減でツネられた。届いているらしい。イタイって。ゴメンナサイ……。

木造の教会の前までやってきた俺達は、一応ノックしてからゆっくりと扉を開けた。

しばらく返答を待ったんだけど、反応が無かったんだ。

中はよく見るフツーな教会だった。中央に奥の教壇まで敷かれた赤い絨毯。その左右に5列づつ配置された長椅子。

正面にある教壇には白いローブを纏ったダンディな白髭の神父さまがたっておりながら。

あれは話せてコトだよな。

絨毯を踏みしめて前進。となりを同じ速度で歩く佐和の顔が心なしか赤いけれど……。

「うふ」

ニヤニヤしながら腕まで組んできた。そのまましな垂れかかってくる。歩きにくいけど仕方ないので、そのまま寄り添って歩く。

「ようこそ、旅人よ。わしの手助けが必要かな？」

おー。定番の言葉。これはきつとチュートリアルクエストだな。

説明書を読むのが面倒な人向けに、ゲーム内のアイテムとか経験値をエサにしつつ、世界背景やルールを把握させる為によく使われるテだ。

続いて目の前に選択肢がポップアップしてきた。

・Accept (是非ともお願いいたします)

・Decline (寝言はネティエ。素手でヒゲ抜き散らかすぞ)

「ちっ」

佐和は舌打ちしつつ迷わずに Decline を連打した。

正気か。コイツ。

「こんな空気よめナイ、じいちゃんの事はおいとして、早くモンスター退治いこうよ」

それが、いけなかった。

後から知ったんだけどグループに招待した俺はグループ内のリーダー扱いになっていて、そのグループでの細かなルールを決めるコトができたらしい。

その中の一つに「クエストの受注はリーダーに限り」っていうチエックがあつたんだが、この時は気づかなかつたんだ。

それも、いけなかった。

その後、チュートリアルをキャンセルしてしまった俺達は行くあてもなく幽鬼の様に森の中をさ迷い、何とかかんとか一番近くの村へ到着。途中でモンスターに会うコトはなかった。期待していただけにちよつと残念に思ったけど、よく考えれば武器も持ってないんだから、ラッキーだったのかも。

到着した村は小さいくせにすっげえ賑わい。スタート地点からの距離を考えてみても、規模にしても、ここが最初の村のはずなんだけどプレイヤーがわんさかいる。

「うーん、酒場とかがアヤしいと思うんだよね」

唸りながら佐和が見つめるのは村の広場にあつた看板。描かれているのは村の地図だ。メニューにある『クエスト』の項目から、どこかに依頼を請けたり、報告したりする施設があるんじゃないか？

と考えたらしい。

だから、チュートリアル飛ばしたのが全ての間違いの始まりだつて、……って言ったらツネられそうだから言わないケド。

「あつ、宿屋と酒場が一緒になった建物があるみたい。ココかな？」
佐和は地図でジョッキとベッドのマークが記されている建物の位置を確認して、その方角を向いた。

「あつてるかも。どっちにしろ、顔出して損は無い施設だとは思う」
俺も同意。ソロだったり、グループを組んでいたり様々だった
が多くのプレイヤーがそちらへ向かって歩いている人の流れがあつたからだ。プレイに欠かせない施設であるのは間違いないだろう。
人の流れに沿って歩くコト5分弱。2階建ての建物の前にたどり着く。

「カンバン、あるね」

軒下には地図に載っていたのと同じジョッキとベッドの印が彫り込まれた木のカンバンがぶらさがっていた。

「だなあ。入ってみるか」

辺りのプレイヤーも続々とその建物に入っていつてるし、俺達もそれに習っていざ入場。

この建物、1階部分が酒場で2階が宿になっているらしい。

1階にはNPCが居るカウンターが二つと、木の丸テーブルの客席がいくつか。片方が宿屋の受付で、片方が酒場のマスターか何かなんだろう。

しかしシヨボい。初期村だけのコトはある。馬小屋かよ。この分じゃ2階の宿つてもヒドいもんだろう。

……あれ？おかしい。

「んー……」

佐和も気づいたのか、辺りをきよろきよろと訝し気に見回している。

「ねね、ヨシムネ。ヒト、いない」

そうだ。あれだけココに入って行っただけのプレイヤーが一人も

見当たらない。

「うん。でも、入り口ってココだけだったよな？」

入り口に突っ立ってそんなコトを考えていると、後ろから肩をとんと叩かれた。

「ゴメンねえ。ちょーっと、通してもらえるかなー？」

どうやら他のプレイヤーが入ってきたようだ。

前に入って行ったヒトは居ないのに、後ろからはヒトが来るのか？　　こういうコトだろう……。

入って来たプレイヤーは女性二人のグループみたいだ。

一人は金髪ロングヘアの少したれ目で、泣きぼくろがあって……。

魔女？　ツバが肩にかかるくらい大きなウィッチハットに、金糸で紋様がちよいちよい入っている黒いローブを着込んでいるんだけど、胸元がハチキレそうなくらいおっぱいがでつかい！

はー、美人さんだわ。ホントに外見トレースしてるの？　現実世界じゃモデルさんかなんかじゃないのこのヒト……。

もう一人は、なんだろう。羽織っているフード付きの外套の下に見える服はイカにも動きやすそうな格好だ。ターバンを巻いているけど、きちんと巻けていないのか、ところどころから黒い髪の毛がぴんぴん飛び出ている。

腰に三日月のように曲がった短剣さしてるし、シーフとか、ローグとか、そんなところかな。体も小さくてすばしっこそうだし。……胸も小さいしね。

そんなコトを考えると、同じくこちらを不思議そうに見つめていた金髪の魔女さんが話しかけてきた。

「……もしかして、ご新規さん？」

「あ、はい。さっきはじめたばかりです」

「ありやー……。制服って……。チュートリアルは？　武器防具一式もらえるはずなんだけど」

「実は『間違えて』キャンセルしちゃいまして」

「あっはっは！　そっか、じゃあ何も知らないよね。少しでいいな

ら、おしえてあげようか？」

ワタリにフネーッ！ 経験者からのアドバイスなんて、チュートリアルより理解し易かったりするんじゃないか？

「ぜ、ぜひー！」

「ちょ、ちよつと、ねえ、ちよつと……」

シーフっぽいさんが金髪魔女さんのローブをくいくい引っ張って、何かを伝えようとしている。慌ててるし気まずそうだ。

「んんー？」

そのまま耳元に口を近づけてぼそぼそしゃべり始めた。

（う、うしろの子、スゴイ睨んでるよ！）

（……アレマ、本当だ）

（きつと彼女だって……。私たち、お邪魔なんだって……）

内緒話が終わったのか、金髪魔女さんがごほんとセキ払いを一度して、佐和に向かつて言った。

「あつはつは。ゴメンね彼女、カレシと二人がいいよね。おネエさん、邪魔するつもりはなかったんだよ、ホント」

イヤ、邪魔だなんてそんな全然。むしろゲームのご教授、こちらからゼヒゼヒお願い致したいんですけれど。

「まー、ここら辺なら心配なにも無いだろうし、しばらく二人でデートしてみるのもイイかもね。おネエさんち、しばらくこの村に居ると思うから、困ったらいつでも声かけてよ」

じゃねー、と手をひらひらさせて軽い感じに2階へと消えていくおネエさんたち。

「がーん、イッテしまわれた……」

「……ああゆーのがイイの？」

「え、佐和さん、何いってんの？」

「ふん！」

俺が救世主の退場を悲しそうに見つめていると佐和に踵で爪先を思い切り踏み潰された。……イタクない。

時間経過での自動回復があるらしく、一応全快まで戻っていたは

ずの【Health】が145/150に減っていた。5ダメージか。30回爪先踏まれたら死ぬんですね、俺。

しかし、ログインしてから食らったダメージの全てが、フレンドリーファイアとは……。先行き不安すぎる。やっぱり、さっきのおネエさんに教えてもらったほうがいいんじゃないかな。

【Health】に気を取られていると何時の間にか酒場のカウンターに佐和が肘をかけてマスターに絡んでいる。どうやらクエストを選んでいようだ。

「それ、Accept。それも。これも」

ああ、やっぱり酒場のマスターがクエストくれるんだな……。つて受諾連呼してませんか、あれ！

「フーイツ！？ 何してらっしゃるんですか！」

ええええ、グループ組んでるせいかな、アイツの受諾したクエストが俺にも追加されてってるんですけど！

・大渦の死翼

・氷土、古城のリッチ

・砂漠の悪夢

・ヴァンパイアの王

・逃れられない死

・魔界へ

「やめろおおおおお！」

初期村とは思えない名前のクエストをがんが受注していく佐和を俺は思わず羽交い締めにした。

「離せ！ あんなおっぱいの力なんて借りなくても、すぐレベルアップしてやるんだ！」

「なんだよ、これ！ 物騒すぎるだろマジで！」

くそ、普通もつと簡単そうな名前のクエストがあるはずだ。佐和にかわって、酒場のマスターと会話する。

・村長のお願い

あった、あった。こういう地味なのが最初に請けるべき名前のクエストだよ。

【対岸に渡るための橋に、野生のリヴァイアサンが住み着いてしまいました。海から迷い込んで来たようです。退治してください】

残念だがその橋の事は諦めてくれ。

野生じゃないリヴァイアサンの存在が気になりつつも、受注可能なクエストを閲覧していく。なんだよ！ 全部デッドリーな内容じゃないか！

「あ！ このマスター、オデコに『凄』って書いてる！」

俺は目の前に居るマスターのオデコに書いてあった文字に気づいた。

スゴイってコトは、上級レベル向けのクエストってコトか！？

下級レベルのクエストはどこだよ！

「ジャマするの？ ヨシムネ、ジャマ、するの？」

そんなコトを考えると、佐和の呟きが聞こえた。すんすんとすすり泣きながらの呟きだ。おそろおそろ視線を移すと、誰がヤツタのか、客席のテーブルに突き立てられている果物ナイフを見つめる佐和の姿が。

「そんなにあのおっぱいと一緒にいきたいの？」

そう呟きながら、佐和は果物ナイフに手を延ばして、柄を指でツツとなぞり始めた。

ごくり……。

やめろ、やめろよ、落ち着けよ……。

「イイよ。イイよね」

握ッ……たー！ マズイ、マズイ、マズイ！

「ヨシムネをコロして、佐和も死ぬー！」

こうして初日にして顔面に刃物を振り下ろされる恐怖を知った俺は、死を異常に恐れるようになり、安全なクエストばかりを受注してきた。

主に採取やら、村の中で済むオツカイやらだ。戦闘は極力避けている。

だって、レベル1でスキル0の佐和の一撃ですら、あんなに怖かったんだ。モンスターの攻撃なんて恐ろしくて……。

佐和は佐和で、そこから拾った武器を装備して訓練所にあるダミー人形に殴りかかっては「しつくりこない」とか言って投げ捨てるのを繰り返している。

レベルも上がらず、お金の貯まりも悪い。スキルだって唯一上がったと実感できるのは【薬草発見】くらいだ。

攻略サイトを覗いたりもしてるけれど、体感ゲームなだけあって、文章で説明されてもワケわからんコトだらけだった。

そんなこんなで二週間。この村の中で二週間停滞している。

服装も初回到トレースした学生服とセーラー服のままだ。最後の思い出だったはずが、毎日着ている。『EWO』内で防具を手に入れた着替えない限りずっとそのままなんだと思う。

このままじゃ、飽きて辞めるのも時間の問題だ。それは何となく悔しい。世界中が熱狂しているハズなのに、俺達は楽しめないってのが多分悔しいんだと思う。

あの2人をお願いしよう。

せっかく用意された舞台はなるべく多く見て回りたいし。

「佐和と一緒に」

そう言ったら佐和はしぶしぶ頷いた。

となりを歩く佐和は、視線は合わせようとしなければさっきよりキヨリが近い。

肩をぴったりくっつけてきて、時々触れる手を繋ぎたそうに指で
チヨイチヨイいじってくるあたり、別に機嫌は悪くはないんだろう。
今日はきつと、ゲームが進む。

その3

「さて、と」

『EWO』にログインを済ませた俺達は、金髪魔女さんとシーフっぱいさんを探すコトにした。

あれから二週間か。金髪魔女さんの「もうしばらく」がどの程度をさしているのかわからなかったけど、まだこの村に居てくれればいいなあ。

ゲームを進めるなんて息巻いたのに、所詮はヒト任せってあたりが情けない。しかもこんなに時間が経ってから「お願いします」なんて、ムシがよすぎる。断られても仕方ないと思う。……頼んでみるけどな。

「とりあえず、広場でも探してみるか」

村の中央にある広場はよく待ち合わせ場所に使われたりしているようだ。ヒトも多い。

現実世界であんな格好してたらすぐ見つけれらるんだろうけど、ココ、みんな格好がファンタジーだから見つけれらるか不安だ。っていうか格好に関して言えば、俺達の方が浮いてる。向こうが見つけてくれれば声をかけてくれるかもしれないし……そういう理由もあって、人通りの多い所に行ってみようってワケだ。

「ヨシムネ、チガウ。こつち」

……佐和が俺の腕をぐいぐい引っ張って引き寄せる。行きたい所があるようだ。

「ええー、そっち広場とは逆なんだけど……」

「いいから、ついてきて？ ……ダメ？」

そんな風に上目遣いをお願いしてこなくても。広場を探すなんてただの思いつきなんだから、他にアテがあるなら別にそっちでもイイですよ。行きますよ。

佐和が俺の腕を引く事、10分。やってきたのは村の出口付近に

ある「訓練所」だった。

ダミー人形（通称、カカシ）が、何本も配置されている場所だ。カカシは無敵扱いらしく、こちらがいくら攻撃を仕掛けてもキズ一つ付かない。新しく手に入れた武器とか魔法を試すのにちょうどいい。

広場と違って、あまり人は居ないんだけど……、お目当ての人はその訓練所を囲む木の柵に腰掛けていたんだ。

こちらに気付いた金髪魔女さんがひらひらと手を振って微笑みかけてきた。

ええー！ 佐和さん、スゲー！ おっぱいレーダーでもついてんの！？

「おっぱい、いつもココで佐和とヨシムネ見てたから、今日もいると思った」

佐和がそう言った。全く気づかなかったわ……。それにしても、居場所を知ってるなら先言つて欲しかったよ。さっきの広場云々の下り、いらないじゃん。ピエロだわ……。

「うん、がんばってるなーって思って、見てただけだ。そろそろ限界かなって。今日辺りにもつかい、こっちから声かけようっておもってたトコ」

何時の間にか柵から降り、隣までやってきて居た金髪魔女さんがそう言った。

「進まないでしょ？ ゲーム」

「おっぱい、どうしてそんなに親切しようとするの？ ……とるの？」

佐和が不安気な表情を浮かべ俺を隠すように抱きかかえながら尋ねた。いらんだろ、こんな低レベル……。

「おネエさんちもね。初心者時代には助けてくれたヒトが居たのよ。

……感動しちゃってね。たかがゲームなのに」

金髪魔女さんは懐かしそうに言いながら少し照れたのか、オデコを掻いた。

「だからね、同じようにシテあげたかったのよ」

昨日の夜も閲覧した、攻略サイト。冒険のススメとかいう項目の所に書かれていたアドバイス。

『自分から声かけてくるヤツは詐欺師が多いから相手にするな』

そう書いてあった。

でもな。

「お手伝い、イル？」

そう言つて微笑んだ彼女の笑顔は、このヒトになら騙されてもいいや、とか、このヒトが詐欺師なら、もう誰も信じられないや、とか。

そんな風に思える笑顔だったんだ。

だから、ついこつちも笑顔になって……。

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

そう言つてぺこりと頭を下げた。この日、この時に、今まで二人だけだった世界に新しい仲間が加わったんだ。……まだまだ俺達はあしでマトイだけだ。

佐和も嬉しそうにぺこりと頭を下げ、……てない。

「……ちゅっす」

首だけでカクツとお辞儀。

ええええ、佐和さん、俺と反応がチガウ！ 態度ワリイー！

「あつはつは。そうかしこまんないでよ。私、ミラね。よろしく。んでこつちが」

佐和、かしこまってるないよコレ。

ミラと名乗った金髪の魔女さんは、後ろで話を聞いていたシーフつばいさんに手振りで挨拶するよう促した。

「リユリユって、いいいます。よろしく？ えっと……」

「あ、俺がヨシムネで、こつちが」

「佐和は、佐和」

ミラさんとリユリユさんは俺と佐和をじっと見つめて、ため息をついた。

「なんだあ、二人、本名かあ」

「え、何かシツパイしちゃった!？」

しまった! 本名ダメだったのか? 登録する時、別に注意も無かったからそのままにしたんだけど……。

「うっん、私もリユリユもハンドルネーム使ってるんだけどさ、『こんにちわー、ミラです』とか自分で言うの、最初恥ずかしくってね」

ケラケラと笑いながら言うミラさんのとなりで、リユリユさんも顔を赤らめてうつむいた。俺、いつもゲームは本名だったからわからないけど、そういうものなのか。

「もう慣れたんだけどさ、そんな経験あったもんだから、初心者の照れるサマ見るのが楽しみになっちゃってね」

「ミラいつも名前聞く時ニヤニヤしてるもんね……」

「ヨイご趣味で……」

よかった……。致命的なミスを開幕からしたのかと思ったよ……。自己紹介も一通り済んで、これからすぐにでもミラさんとリユリユさんが俺達にこのゲームのイロハを叩き込んでくれるコトになった。一度には無理そうだから、何回かにわけてになりそうだけど。「まずは、そうね。本当はあんまり良くないんだけど、スキル見せてみて」

ミラさんの言う通りに俺は自分のスキルリストを開いた。

L v 2 ヨシムネ 【Health】 2000/2000 【Mana】 5/5 【Jpn】

スキル

・薬草発見 8

・採取 4

・回避 2

「二週間でこれは、あまりにもあんまりだよ……」

リユリユさんがそうつぶやいたのを、俺は聞き逃さなかったぞ！
だって、しょうがないじゃない。慣れてるヒトは感が利くんだろ
うけど、俺も佐和もオンラインゲームなんてかじる程度しかやった
事ないんだもの。

「じゃあ次は、佐和ちゃんね」

「ふあい」

なんだか気の無い返事で次は佐和がスキルリストを開いた。そう
いえば、比べた事ってなかったな。

比べてみようとしたコトあったはずなんだけど、俺と動きが大差
なかったし、スキル値もそう変わらんだろと思って後回しにしてた
んだった。

行動もずっと一緒だし、今も俺のとあんまり変わらないと思う。

お前もリユリユさんに言われるぞ。あまりにもあんまりだよって
なあ！

L v 2 佐和 【Health】 2000/2000 【Mana】

5/5 【Gbn】

D u g g k

• g b n t t f

• m u t t l e t t n g r r

• s d d g l e t t n g r r

• g g r e d d l e t t n g t r

• f r t t s a g l e t t n g f

「読めねえよ！」

リユリユさんでなく、俺の方が思わず叫んでしまったよ。なんだ

これ、文字化けしてんのか!?

あつ! 【】の中が違うぞ!

俺の「jpn」ってどう考えても日

本、だよな。なんで佐和の【Gbn】になってるんだ!? G

bnってなんだよ……。

「……【ゴ布林言語】……!」

リュリュさんが驚嘆の声をあげた。俺の時は呆れられたっていうのに。くそ、なんか負けた気がするぞ。

「佐和ちゃん、あなた、ゴ布林言語に興味があるの……!?!」

ミラさんも佐和に掴みかかる勢いだ。ゴ布林言語、よくわからんが、恐ろしい……。

聞かれた当の佐和は特にゴ布林言語には興味が無かったらしく、マユをひそめて、首を横に振ってからこう言っただ。

「c o f f t t o f f」

ちよつと、喋ってるー!

「いじつてたら勝手になつちやっただけど、最近ちよつと読めてしゃべれるようになったの。スキル、あがった?」

俺が草むしってる間にコイツは異文化コミュニケーションの準備を進めてやがったのか。俺よりファンタジーしてるじゃないか……。「んー。佐和ちゃん、とりあえず、自分が完ペキに読める言語に戻そうか」

なんでもデフォルトの設定では、データカードに登録した国の言語が基本になるんだけど、簡単な英語は雰囲気を出すためにそのままの表示になっているらしい。メニューリストとか、ヘルス、マナが英語表示なのはそのためだとか。スキルの名前とか、NPCとの会話とかは翻訳対象になってるようだ。

ゲーム内に存在する種族の言語の習得条件を満たせばその言語に設定もできると、ミラさんが教えてくれたんだけど……。どこでゴ布林言語覚えただよ。

佐和はミラさんに言語表示の切り替えの方法を教わって何とか日本語に戻す事に成功したようだ。

これでようやく比較ができる……。

L v 2 【Health】 200 / 200 【Mana】 5
/ 5 【Jpn】

スキル

- ・ゴブリン言語 12
- ・剣術 2
- ・槍術 2
- ・棍術 3
- ・格闘 4

ゴブリン言語めっちゃめっちゃ高いじゃんか！

色々な武器のスキルが上がってるなあ。

あれか、カカシを適当な武器で殴ってたから色々上がってるのか。

おや？ でも武器スキルの中だと格闘が一番上がってますよ？

少なくとも俺が見ている間はカカシに格闘なんて使ってないと思うんだけどな。

ああ……。もしかして、俺を殴ったりしてたから上がったのか……

……。カカシより殴られてたんだな、俺。

ふーむ、と唸りながら佐和のスキル値を見つめるミラさんとリュ
リュさん。

「武器いっぱい使ったけど、どれもじっくりこなくって……」

二人の反応が薄いのが不安だったのか、佐和もそう言って気まず
そうに眉を垂らした。

「複数個の武器スキルを上げること悪くはないけど、メインは一
つに絞ったほうがいいわ」

お二人の説明によると……。

各武器には主スキルが設定されていて、その主スキルの値が武器の使用に大きく影響を及ぼす。

それとは別に、副スキルが設定されている武器も存在し、それらは副スキルの値に応じてボーナスを得るコトができる。

例えば、クォータースタッフだと一応は棍棒扱いのために『棍術』がメインスキルになるが、『槍術』のスキルもあれば、ボーナスを得る事ができる。

こういった武器を使う場合には複数個の武器スキルは攻撃力ブーストの手助けになるだろう。反面、多くのスキルを育てる事にはデメリットも存在するので、苦勞も増える、とのコト。

クエストをメインに攻略していく、ダンジョンを踏破する、対人戦で戦功を立てる。

プレイスタイルに応じて選択するといいたろう、そうミラさんは教えてくれた。

俺の時は飽きられただけなのに、佐和さん一杯アドバイス貰えてませんか？

「佐和は、ヨシムネとしかしないから、ヨシムネが決めて」

佐和は今後のプレイスタイルの全権を俺に委ねてきた。

俺はまだ自分のことも決めてないってのに、正気か。

もしかして、説明聞くの面倒になっただけだろ、お前。こっちが頼んでるんだから、ちゃんと聞かないとダメだぞ。

俺は佐和のほっぺたを両手で、ぐにぐにとツマんだ。途端に涙目だ。

知ってたんだ。コイツ思い切り引っ叩いたりすると、ノリで反撃してくるけど、こうして地味に責められるとどうしていいかわカラナイらしく、ぼろぼろ泣き出すんだ。

まあいいやと、そのまま無言で責め続けると、とうとう唇をへの

字にして震わせ始めた。

マズい。これ以上ぐにぐにしていると、きつと泣く。でも、モチモチして、何となーく離すの勿体無いんだよな。

「しくしく」

あ、ついに泣いた。まあいい、続行、続行だ……！
むにむに……。

そんなコトをしていると、佐和は力無く俺の手を振り払い、首に手を回してぎゅうと抱きついてきて、さめざめと泣いた。

「ゴメン、ね……？」

ナゼか謝ってきた。勝ったわ。やってやったわ。けど、すごい罪悪感。しかし、俺も男だ。この程度では動揺しないぞ。

「今回は許してやる。次はするなよ？」

コクコクと頷きながら佐和は俺の肩に顔をこすりつけた。鼻水拭いてるだろ、コレ……。

でも何のコトか知らないけど、もう次はしないってヤクソクを取り付けたぞ。言ってみるもんだ。これでもう次はしないよな。何をしないんだか、全くわからないけどな。これ、佐和も雰囲気で適当に謝ってるだけだろ。

「佐和ちゃんは、まだ私らがヨシムネくんを取らないか、心配してるのよねー？」

佐和の腕に力が入った。服にしがみついて、ふふつと笑いかけるミラさんの方に顔を向けようとしてもしない。

「ま、どんなプレイスタイルにせよ、武器スキルは最低イッコ上げておいた方がイイよ、どこまで上げるかはおいといて、ね」

と、ミラさんが言った。確かに、村から移動するにも攻撃方法が無いと不便だろう。

逃げ足だけで何とかなると思えないし。

「佐和ちゃんが言う『しっくりこない』っていうのは、スキル値が低いせいなの。我慢してスキルを上げていけば手に馴染むハズよ」

そう教えてくれたミラさんに佐和は視線も合わせずに、無言で頷

いた。

「佐和ー、ちゃんと返事は、ハイ」

俺が佐和を引き離しながら叱ると、佐和は口を尖らせて、頭を下げたまま、つま先で八の字を描き始めた。

「ふあい……」

コイツ、態度、ワリイー！　ここはガツンと、イットかないと、今後のためにもいけない！　よくない！

ばしん！　とデコピンしてやったわ。

「よよ……」

また俺に抱きつききて、さめざめと泣いた。何だろう、機嫌ヨクナイのか。ログイン前はそうでも無かったと思ったんだけどなあ。

仕方ないので慰める様に佐和の頭を撫でてやりながら、ミラさんにたずねた。

「そういえば、ゲーム内で離れた人と連絡をとったりするにはどうしたらいいんですか？　あ、ささやきチャットでいいのかな。でもあれ、ちよつと届いてるかどうか確認し辛いですよね」

「ささやきチャット？　何それ？」

あれ？　別の呼び方があるのかな？

「一応、魔法使い同士なら、『テレパシー』とか、後は通信機みたいなアイテムもあるけど。デフォルトのシステムじゃ、そんなの用意されて無いわよ？」

あれ？　佐和さん？　先日通じてましたよね？　え？

「よよ……」

そんなコトを思う俺を無視して佐和はまだ泣き続けていた。通じてるのか判断できないぞこれ……。

ミラさんはそんな俺達を不思議そうに見つめながらも説明を続けた。

「遠隔で会話するような魔法は高位で、通信用のアイテムは高価だから入手はまだ後になるわね。後は、フレンド登録かな」

「フレンド登録？」

「ええ。フレンド登録しておけば、登録している人のログイン状態、大まかな居場所はわかるわ。それと、到着までに少し時間がかかるけど、ゲーム内でメールのやり取りができるわね」

「おー、それだけでも随分便利だ」

ログイン状況と居場所がわかれば、同じエリアに居るコトさえわかっていれば合流は今までより格段に楽だしな。

よくよく考えてみれば、ミラさんちがログインしているかどうかも知らないで探してたとか無謀だよな……。

「あの、差し支えなければ、お二人とフレンド登録させていただきたいんですけれど」

俺のその言葉を聞くと、ミラさんとリュリユさんはケラケラ笑った。

「モチロン、イイんだけど、そんな硬く言わないでよー！ 今後もしそんなだと、肩こっちゃうよ？」

そう言ってミラさんは手を差し出してきたんだけど……。それをリュリユさんは慌てて遮ったんだ。

そのままミラさんの耳元でぼそぼそと内緒話をはじめたぞ。何か問題でもあったのかな……。

……トモダチ……。ボクはただトモダチになりたいだけなんです、オネガイシマス……。

「えー、そんなトコまで気にするヒトいるの!？」

「わ、私はキになるかな……」

何やら内緒話を終えたミラさんとリュリユさんが改めて佐和に向かって言ったんだ。

「ごめんね？ 佐和ちゃん。ヨシムネくんのフレンドリストの一番は、アナタがいいよね？」

『ケータイのメモリのNo.1は、トクベツ!』みたいなアレか。リュリユさんオトメですねー。

佐和は俺の肩に頬をくっつけたまま、そんなミラさんの言葉に答えた。

「佐和は、ヨシムネの『友達』じゃ、ナイから、イイ……」

「アラヤダ！ 意味深ね！」

「……！ いらない心配しちゃった……」

そんな佐和の言葉を聞いた二人はおばちゃんみたいな反応をしつつ顔を合わせてきゃーきゃー騒ぎだした。噂ダイスキな井戸端erのように会議してる。でもミラさん、リユリユさん、俺、オトコですよ？

それはともかく、ミラさんはひとしきり騒いだあと、再び手を差し出してきた。

「はい、握手。よろしくね？」

「こちらこそ」

俺がミラさんの手を握り返して、そう答えた途端、メニューリストが一つ追加された。

・ Friend List

おお、これで完了か。メニューって増えるんだな。最初のは最低限しか表示されてないのか。今後が増えるかもしれないな。

その後、俺と佐和はリユリユさんとも登録を済ませた。

「よし、じゃあ。今日はこれくらいにしようか。おネエさんち、明日はクエストあるからちよっと教えられないけど、メールで『宿題』送っておくから。明日、時間があるようならやっておいてみて」
ミラさんにそう言われて時間に気づく。すっかり話し込んでしまったけど、もう結構いい時間だ。俺達も帰るとしようか。

「じゃあ、俺達もそろそろ。ミラさん、リユリユさん本当にありがとう。これからもヨロシクお願いします」

ミラさんとリユリユさんに改めて挨拶とお礼を済ませ、ログアウトするために宿屋へと向かった。

このゲーム、どこでもログアウトもできるんだけど、宿泊施設が近くにある場合はそこでログアウトしたほうがいいらしい。

屋外でのログアウトは5分ほど時間がかかる上、次のログイン時、入った途端に敵に囲まれているコトもある。村が襲撃されるイベントも用意されているので、村にいる場合でも宿屋でのログアウトが推奨されている。

宿屋の各部屋は『NPC、Mob（敵対的なNPC）、グループもフレンド登録もしていないPC』は入り込めない設定になっているので、完全に安全地帯となっているそう。酒場にヒトが居なかったのもここら辺が関係してるのかな。

宿屋でログアウトを済ませた俺達が「00」から外に出ると、辺りはすっかり暗くなっていた。アラームの機能とか無いのかな。時計だけだと確認を忘れちゃうんだよね。

それはそうと、言わなければならぬコトがあったんだ！俺は佐和に視線を送った。目が合った……途端に、佐和は視線をそらす。一応、悪いとは思っているらしく気まずそうにうつむいた。「さーわー……。こっちから頼んでるのに、ちよっとヨクナイぞ、あれ」

「……ヨシムネ、佐和と二人の時より、イッパイ楽しそうにおっぱいと話してた」

佐和はがっくりと肩を落とした。いつもの何倍も小さく見える。声だけでなく、存在ごと消えてしまいそうなほどに力無い。目を離したら、このまま辺りの闇に沈んでいってしまいそう。

「佐和、いない？」

え、そんなコト思ってたんですか？

あーれー……。ログイン前にも言ったハズなんだけどな……。

「あのな、言っただろ、『佐和と一緒に』って」

「……もっかい言って？」

「そう言われると、ハズかしいからイヤだ」

「……でへっ」

俺が何となく恥ずかしくなって照れていると、佐和は嬉しそうに

指を絡ませて手を握ってきた。

「……ぐふ、ぐふふ」

佐和さん、そのおっさんみたいな喜び方、何とかありませんか……。

産まれた病院も同じなら、産まれた日も同じ。両親も友達同士で、家も隣合わせだし、部屋だって二階の向かい合い同士。

学校のクラスも毎年一緒に、席もいつも前後左右どこかに佐和がいる。

いや、……この二つはチガウ……。小学校の頃、別々になりそうになったコトがあったんだ。

そうしたら、佐和が、アレッ、アレエーッ、なにしたんだっけ。思い出せない……。思い出したくない……。アタマガイタイ……。コワイ……。

とにかく、それ以来、俺と佐和を別々のクラスにするコトはアンタッチャブルになったらしい。

そんな腐れ縁、隣に居ない方が不自然なんだ。今更、いらないなんてそんなワケ無いのになあ。

伝えてるハズなのに、俺の信用が無いだけなのかな。

その日の夜、自宅二階にある俺の部屋の窓が小さな音をたてて開いた。

からからと、俺を起こさないように気づかっているのがわかるんだけど、……起きちゃったよ。

起きちゃったけど、俺は別に目も開けない。来客の正体も解ってるし、来た理由も解ってるからだ。

来客は忍足でベッドに仰向けに寝ていた俺に近づき、覆いかぶさってきた。湯上りなのか、少し熱い。

そのまま俺の頭を半分ずらして、マクラにスペースを作って、自分の頭をそこに乗せた。

ドライヤーで乾かしたばかりの髪が頬を擦って、甘いシャンプーの香りがただよってくる。耳元に息がかかって、くすぐりたいぞ……。

そのままソイツは俺の首スジにつつ、と指を走らせてつぶやいたんだ。

「佐和、めんどくさくて、ゴメン、ね？」

メイワクかけたなって自分で思った日はこうして夜謝りに来る。

佐和も俺が起きているのに気づいてるし、俺も佐和がそれを知って言っているのを知ってる。

いいよ、別に面倒だなんて思っていないし。俺はそうココロの中でつぶやいた。

「……アリガト……」

え、佐和さん？　ここ現実ですよ？　あれ？　……ささやきチヤットすげえコワイ……。

でもまあ、これで明日はきっと大丈夫。

安心したように、すうすうと寝息をたて始めた佐和とは逆に俺の目は冴えに冴えていた。

最近、ケンカとかしてなかったし、佐和がベッドに潜り込んでくるなんて久しぶりなせいかもしれない。

マズイ。一度気になりだしたら、佐和の髪からする甘いシャンプーの香りが頭から離れない。

いや、リンスなのかな、これリンスなのかな。ハアハア、ぎざぎざ……。

……ナマゴロシってこう言うのか。落ち着くんだ、ヨシムネ。きちんとか？　謝りに来た佐和に失礼だぞ。

こうして悶々としたまま、俺は眠気が勝るまで煩惱と死闘を繰り広げた。

勝利した頃には外でチュンチュンとスズメが鳴いていたが、それでもやったんだ。俺は勝った。

ガツコ、今日休みでよかった……。けど、佐和が起きたら、俺も起こされるんだろうな。せめてそれまでは安らかに眠らせてくれ……。

そんな俺の心配をよそに、その日はなぜか佐和も中々目を覚まさなかったようで、活動開始は昼過ぎになった。

その4

香月佐和は、拒絶する。

半身と認めたヨシムネ以外は自分の内側に入れない。
時にそれは弱さだった。

香月佐和の世界はヨシムネだけで満たされた。それで十分だと思
っていた。

けれど、ヨシムネは違った。

ヨシムネは暗がりにいる佐和に手を差し伸べ、光のあたる場所へ
と連れ出そうと必死になつてくれた。

佐和の世界を広げようと。佐和に世界の美しさを見せてあげたい
と。

ヨシムネは佐和の手を引き、そう願った。

けれど、佐和は、望まない。

佐和の世界が広がればヨシムネの世界も広がっていく。

ヨシムネの中に別の誰かが入り、自分の居場所が無くなるのが怖
い。

自分が他人をそうしてきたように、ヨシムネに自分が弾かれてし
まうのが怖い。

なら、変わらなければいい。

誰も寄せつけず、今まで通り二人でいれば佐和の世界は守られる。
だから、

香月佐和は、拒絶する。

題名「人見知り」

「やめてええええよおおお！」

休日、昼過ぎからログインした俺は、昨日の佐和の態度への罰に、
自作のポエムを朗読していた。広場で。めっちゃめっちゃ人通りの多い、

広場で。ありがたく思え。徹夜で作った大作だぞ。寝れなかったから暇つぶしに作ったただけだな。読む方にも相当なダメージがあるが、そこは教育の痛みと思って耐えるさ。殴られた方だけじゃない。殴った方だって痛いんだぞ、佐和。

そんな俺のポエムを聞いた佐和が、顔を真っ赤にして叫んだ。顔どころか耳まで真っ赤だぞ。恥ずかしいか。そうか。俺もだ。

「もう、ユルして！ 謝ったじゃん！ 昨日あんなに謝って、ヨシムネだって『アシタ ハー、キットウ、ダイジヨブウ』とか言ってたじゃん！」

「そんなカタコトで話さないし！ そもそもそれは口に出してないだろうが！ 何で知ってたんだよ！」

謎のささやきチャットのせいで思考がだだ漏れた。マズイ。何とかしないと……。

ただでさえ自室にプライバシーなんてもんが存在しないのに、頭の中までプライバシーが無くなったら妄想もできやしないじゃないか！

「……今までヨシムネ、気付かなかったダケなのに。昨日だって寝てる振りしてるトキ、あんなコト思ってたの知ってるんだ！」

ええええ、思考16年間ダダ漏れ！？ マジで！？ 元からプライバシーとか無かったかー！

昔そんな話あったな。あれ見た後『自分もそうじゃないだろうか』なんて気になって気になって、他人に念を飛ばしたりしてみたけどその時のテストでは陰性だったはずだ！

……再検査が必要か。俺は道行く人に念を飛ばした。

『あ、あのヒト、おっばい、おっ……ちっちゃーい』

「ヨシムネのコト、わかるのは佐和だけだ、バカー！」

俺の爪先を佐和が踏み砕いた。

【Health】 160/170

ダメージ倍化！ 佐和さん、格闘スキルの成長効果出てますね。そんなコトをして居る俺達に、さっき念を飛ばしたおっばい小っ

ちやいヒトが近づいてきたんだ。

やばい、陽性疑惑！ ささやきチャットが通じるの佐和だけじゃないじゃないか！

「な、何やってるの……」

近づいて来たヒトが呆れたようにそう声をかけて来た。

あ、おっぱい小っちゃいヒトだと思ったらリュリュさんだったのか。

リュリュさんに気付いた途端に、佐和の体が棒の様になった。コイツまさかまた昨日みたいになるんじゃないだろうな……。

「タイム！」

「ど、どうぞ……」

危険を察知した俺はタイムアウトを要求し、リュリュさんもそれを快諾。

よし、作戦会議だ。同じテツは踏まないのがデキるオトコだっておばあちゃんも言ってた！ おばあちゃん……。う……。

祖母との思い出に込み上げてきた涙をぐっと堪えつつ、佐和の肩を抱き寄せて小声で囁く。

（おい、佐和。昨日みたいなの、ナシだからな）

（……ふあい）

佐和は顔をそらし、不機嫌そうに答えた。知ってるぞ！ これはヨクナイ返事だ！ コイツは、またやる！ マズい！

（……佐和、お前、仲良くなる為にリュリュさんにあだ名つける）俺は後々考えればズイブンとテンパった提案を佐和にした。

この時は、ただ佐和がリュリュさんと仲良くなってくれればと、その一心でのコトだったんだ。

（なんで！？ 佐和、ムリ！）

（いいのか？ ……実はあのポエムは第一章なんだ。第二章は、『謝罪のコトバ』というサブタイトルでな……）

（やああめええええええ！ わかった、わかったから！ ヤメテ！）

「あの、ゼンプ、聞こえてるんだけど……」

「リユリユさあああん！」

「ハ、ハイ!?」

「佐和があだ名を付けたいそうです」

「は、はあ。だからあの、ゼンプ、聞こえてただけ……」

「いやあ、佐和のヤツ、仲良くしたいヒトにあだ名つけるのが生のハリガネムシの次に好きなんですよ」

「そ、そうなんだ」

何とかお前が考える時間は稼いだ！ いけ！ 佐和！ ガツンと行って言つてリユリユさんのココロをワシ掴みにしろ！

そんな時、俺の期待に応えるように、佐和がつぶやいたんだ。

「……ムニユウ、ムネナシ……」

！ ？

「リユリユのあだ名は、ムニユウ ムネナシだあああ！」

やりやがった！ 柳生一族の一人みたいな発音でいいやがった！
「だからいったもん！ さっきいったもん！ 佐和ムリだっていったもん！」

ぎゃあぎゃああと泣きわめく佐和とは対象的にリユリユさん改め、ムニユウムネナシさんは虚ろな瞳で地面にがつくりと膝をついた。
何だかムネナシさんの周りだけどんよりとしている気がする。

「諦めない勇氣、諦めない勇氣、まだいける、私は大丈夫……」
なんかブツブツ言ってる……。マズい……。

「ヨシムネがワルいんじゃない！ ヨシムネがへんなコトいうから！」
「ごめんなさい。それ、ごもつとものです。」

「本当に申しわけございませんでした」

その後、二人の復活には5分を要し、その間、俺は土下座しつつ自分の提案の浅はかさを悔やみ続けた。

「ふー、大丈夫、大丈夫、私は大丈夫……」

そう言いながらリユリユさんは立ち上がった。ムリしてるなあ。

あれ？ でもなんでリュリュさんここに居るんだろう。

「そういえばムニコ」

「カッ！」

すごい顔で威嚇された。触れてはならないモノだこれは。

誤魔化す様に、ごほん、と気を取り直して。

「……リュリュさん。昨日、ミラさんとクエストに出るって言ってませんでした？」

「うん。これからいくよ。で、でもその前に渡したいモノがあつて……コッチ、きて？」

そう言つてリュリュさんが俺達を案内したのは、元々居た広場に隣接している石造りの建物だった。

宿屋と比べていくらか立派な建物。広場に隣接している建物群の中でも一際ヒトが多い。

中に配置されているNPCの前には鉄格子が張り巡らされていてパツとみ、刑務所みたいだ、と思つたけどきつと違う。

よく見ると、鉄格子は逃がさないためっていうより、『守るために張られているようだったからだ。』

外国のコンビニとかがこういう風になつての見た事あるな。

あ、NPCの後ろにでつかい金庫がある。なら、多分ココは……。

俺達が辺りを見回していると、リュリュさんは鉄格子に近づき、NPCと何か話しはじめた。

それからしばらくすると、リュリュさんの前の鉄格子が一部分だけ開き、中から大きめの木箱が出てくるのが見えた。

おー、当たり。ココ、銀行だ。

ああやって、アイテムとか預けたり、引き出したりできるのか。料金とかどうなってるんだろ。どっちにしろココは絶対使うよな。覚えないとダメな施設だ。

リュリュさんはその木箱を撫でたり、口をへの字にして見つめたりして、ため息をついてたんだけど、意を決した様に俺たちに向かって絞り出すように言った。

「し、下から数えた方が早いぐらいの、あんまり……、じゃない。全然かな、あはは……、よくないものなんだけど」

そう言いながらもじもじと恥ずかしそうに木箱の蓋を開いて中身を俺達に見せてくるリユリユさん。

「ミラの宿題するには充分だと思うから……その、よかつたら……使って？」

身を乗り出し、木箱の中身を見つめる俺達。その中身は……。

「み、ミラにね、リユリユは器用そうだし、クラフトしてみたらって言われて、はじめてみたんだけど、やっぱり、スキル低いからまだあんまり上手くなくて……」

わんさかと詰め込まれた、お世辞にもイイモノとは言い難い粗悪な武器。きつと売り物にはならないんだろうなあ。

「い、いらないかなあ？　　いらないよね、あはは、ごめんね、こんなゴミ……」

俺達の無反応っぷりを見て、幻滅されたとも思ったのか、リユリユさんはあわてて木箱の蓋を閉じようとした。俺はそんなリユリユさんの手をとっさに掴み、叫んだ。

それを捨てるなんて、とんでもない！

「家宝にします！」

ウレシくてコトバも出なかったんですよ……。ムニユウ　ムネナシ、めっちゃめっちゃいいヒトじゃん……。足向けて寝れないよ。

「ヒトにもらってもらったの初めてなの……に、そこまで言ってくれるなんて、嘘でもウレシイ……。ありがとう、ね？」

そう言っ少し恥ずかしそうにしながら、リユリユさんは潤んだ瞳で見つめてくる。

そんなリユリユさんと見つめ合う俺の背中に向かって佐和がパンチやらキックやらを連打している。きつとスゴイ怒ってる。後ろを確認しなくてもわかる。だって、【Heal　th】がすごい勢いで減ってっているもの。

何とか死一步手前で佐和をなだめる事に成功した俺は、リユリユさんに改めて感謝した。

「じゃあ早速、これを使って宿題進めます！」

「あ……、まって」

木箱を佐和と一緒に持ち上げようとした俺をリユリユさんが呼び止めた。

「もし、村の外に出るなら……クジラの鳴き声には気をつけて」

「クジラの鳴き声？」

「トラウマできちゃってログインできなくなったり、……最悪戻れないっていうプレイヤーが出てくるコトは知ってる？」

「あ、はい。知ってます。それが怖くて中々戦闘に踏み切れなくて」

そうだ。そんな話聞いちゃってたもんだから『試しに死ぬ』っていうのが怖くてできない。だってなあ……。

「それ、大半がレブナントに殺されたからなの。ヨシムネくんは心配してるみたいだけど、普通にゲームをしていて死ぬ分には、スキルのロスだけですむよ。こっ酷くやられると、ロスもスゴイけど、接戦で負けたりすると、得るものの方が大きい場合もあるくらい」

え、そうなの？ ……そりゃそうですね。死ぬと現実に支障が起きるなんてそんな危険なゲーム、そこいらに置いとかないよな。普通。

でも、『レブナント』って……？

「レブナントは……、クジラの鳴き声の様な音で鳴くんだって……」リユリユさんはそうぼつりと言った後に続けた。

「レブナントが出ると、近隣のエリアにシステムから現出座標のアウンスがあるから、よっぽどのコトが無い限り遭遇までには至らないけど。運営も把握できてないバグだって噂もあるんだけど、おかしいの。あいつら村には入って来なくって……。まるで、ゲームのルールを守ってるみたい……。バグだったらお構い無しの気もするんだけど……。め、滅多にでて来ないからダイジョウブだと

思っただけど、一応、ね？」

そう教えてくれたリュリュさんの表情は本当に不安そうで、その話が真実だという事を物語っていた。

「……リュリュさん、さっき、戻れないって言ってたけど、どこから？」

『この世にない、この世のどこか』

そう呟いたリュリュさんがなぜか、まぶたに焼き付いて離れなかった。

だから……。

信じている。信じているけど、聞かずにはいられなかったんだ。

「……リュリュさんは……、戻ってきますよね？」

「あはは、やだなあ。明日には戻るよ。それじゃ、そろそろ行ってきます！」

手を振って去って行くリュリュさんは、明るい声とは裏腹に、何故かとても儚げに見えたんだ。手をのばせば消えてしまう蜃気楼のように、触れれば崩れてしまう砂の城のように。

そのまま戻って来ないような、二度と会えないんじゃないかって、そんな予感がした。

佐和が俺の袖をきゅっと掴んだ。コイツも何かを感じとって、不安に思っているのだろ？。何だかんだ言って、心配してるあたり、一応仲間って思いはじめてるのかな。だったら俺も嬉しいよ。

「きつと……、大丈夫」

そう言って微笑みかけると、佐和も頷いた。

『この世にない、この世のどこか』

人ごみに消えて行くリュリュさんの背中を見つめながら、その言葉を思い出していた。

俺達はリュリュさんの姿が見えなくなっても動けずに立ち尽くしたんだ。

ミラさんとリュリユさん。

どうしようもない俺達に、良くしてくれた優しいヒト達。

この世界で始めてできた仲間。これからもずっと一緒に……。

そう思っで、願っていたのに。

二人は三日経っても俺達の前に姿を現す事は無かった。

その5

四日目には戻ってきたけど。

久しぶりに四人で集まった俺達は、酒場の一席で、飲み物を傾けながらここ数日の報告を行っていた。

「いやー、まいったわよ。渡る予定だった橋を野生のリヴァイアサンの破壊しちゃったみたいでさあ。遠回りで、時間くっちゃって」
「へえー。そんなコトあるんですね」

がくがくがく。ヤバイ、マズイ。もしかして、前に俺がクエストを請けたから野生のリヴァイアサンが出現して橋を破壊したのか？ それとも野生のリヴァイアサンが出現したからクエストが発生していたのか？

俺のせいで出現して橋を破壊したとなると、お二人だけでなく、多数のプレイヤーの皆様にご迷惑をおかけしてしまったのではないだろうか。

よし、黙っておこう。俺は無関係だ。無関係なんだ。

「ぐふ、ぐふふふ」

……。くそ、気付いたか。佐和が顔を近づけてきて不敵に笑ってきやがった。

（ヨシムネ、佐和にいうコトない？　ねえ、ない？　ないの？）
脅すつもりかコイツ。仕方ない……。

（……購買でシャーペンの2Hの芯を1ダース奢ってやる）
「やったー！　2H！　2Hだー！　2Hが12コだー！　イイだろー！」

椅子を蹴って立ち上がり、突然大騒ぎをはじめた佐和に向けられる視線。二人とも佐和を心配してくれているようだ。

「すいません、たまに発作を起こすんですよ。気にしないで続けてください」

「……発作……！？」

俺はフォローしてから、ミラさん達に話しを続ける様に促した。フォローのおかげで、二人の佐和を憂う視線が強くなった気がするけどな。

「ま、まあ、こっちは無事にクエストが終わったわ。そっちはどう？ 『宿題』やれた？」

「えーっと、俺達は……」

俺達はリユリユさんを特に意味も無いのに意味深に見送った後、そのまま銀行で木箱を物色し、頭を捻っていた。

ミラさんから送られて来た『宿題』のメールにはこう書かれていたんだ。

『自分の使用するメインの武器を決め、カカシ相手にある程度までスキルを上げること。二時間程度殴れば20くらいまでは上がるハズ』

ミラさんは『参考に』と、各武器の特長も一緒にメールに書き、送ってきてくれた。至れり尽くせりだ。

しかし、悩む。

王道と言えば、剣だ。でも、人気が高い武器は値段も高いだろうしなあ。他のヒトとアイテムの奪い合いで仲違いとかになってもバカくさいし。

「佐和はせっかくだからコノ赤いのにする」

悩む俺の横で佐和は真っ赤な刃のオノを手にとった。柄の長い、両手持ちのオノだ。

あれ？ そんなのあったっけ？ 色もキツいし、見るからに呪いのアイテムだぞ、コレ。

俺は少し心配になって佐和を見つめた。

「ぐふふ、ぐふ、ぐふふふ」

佐和は嬉しそうに柄の部分に頼ずりしている。よし、大丈夫だな。

えっと、オノの特徴は……。

- ・ 重い
- ・ だからこそ強い
- ・ それゆえに遅い
- ・ (主) 剣術スキル
- ・ (副) 伐採スキルでボーンラス

当たれば強いのか。打ち上げ花火みたいな武器だな。佐和にはぴったりだ。

「ヨシムネ、これで佐和がマモってあげるね」

そんな風に言われて、ちょっと嬉しかったので、佐和の頬っぺたを撫でてやったら、ネコみたいに手に擦り寄ってきた。

「えへへ」

佐和に一方的に守ってもらうだけなんてワケにはいかない。俺も佐和を守るんだ！

そうとなれば、気合いれて決めないとな。

佐和のオノみたいな重そうなのは俺には合わないと思うなあ。軽く、持ち運びし易いのがイイ。

うーん。考えていてもラチがあかない。片っ端からイッコ、イッコ確認していこう。条件に合う武器を探すんだ。

俺は木箱の中から適当に武器を選び手にとった。

これは、……三角コーナーのネットだな。この武器の特長は、と。

・ 軽い

バッチリじゃん。軽いし、持ち運びし易いし、正に俺が望む武器だろこれ。問題は、武器じゃなくて台所用品だってコトか。致命的な問題だな。

俺は後ろ髪引かれつつも、三角コーナーのネットを木箱に戻し、

次の武器を手にとった。

さて、次は……と。

これは……、栓抜きだな。

・軽い

・悪役レスラー向け

リュリュさん、やけに台所用品推してくるな。

首に腕を回して固定して額を割るのか。カカシ相手に額割ってス
キル上げか……。恥ずかしくて集中できなさそうだな。

ふむ、何だかおかしなモノがたくさん紛れ込んでいる気がするぞ。
リュリュさんは片付けられないヒトだったりするのかも。とな
ると、佐和のオノも本当は俺達に渡すつもりが無かったモノって可能
性もあるな。使うのは確認をとってからにした方がイイかもしれな
い。

「えへ、えへへ」

佐和はぎゅっとオノを抱きしめて笑ながらつぶやいている。

「マモってあげるからね。ダイジョウブだからね、えへへ」

ダメだ。手遅れだ……。いくらなんでも、これを取り上げる勇気
は俺には無いよ……。

……自分のコトを決めてしまおう。

「うーん」

これは……、イマイチ。……こつちも、コツチも。

次々と手にとって詳細を確認してみるが、どれもこれもピンと来
ない。

佐和はニコニコしながら俺と抱きしめたオノに交互に視線を送っ
ている。早く試しに行きたいんだろうな。

「ごめんな、佐和。もう少し待ってて」

こくりと、佐和は一度大きく頷いた。二人になるとイイコだなあ。
そんなコトを思いながら再び木箱に視線を戻し、しばらく悩んだ

結果……。

何とか、自分に合いそうな武器を見つけるとできたんだ。しかし、残念な事にその武器を見つけ出した頃にはもう遅い時間になっていて、試し斬りは明日へ持ち越しとなった。

こうしてこの日の『EWO』での活動は終了した。

「ホント、ごめんな佐和。時間くっちゃって」

帰り道、謝る俺に、佐和はぶるぶると首を振った。

「ウウン、別にイイ。明日の楽しみにするから」

楽しみだったろうに、悪いコトしたな。

もう一度しっかり謝っておくべきか？ そんなコトを考えていたけど、結局タイミングが無くてそのまま自宅に到着、解散に至った。

その日の夜。

自室の窓から向かいの佐和の部屋を見た俺は無言でカーテンを閉め、ベッドへ潜った。

だって、向かいの窓にはこう書かれた垂れ幕が下がっていたんだ。

『熱烈的謝罪歓迎』

無視して寝たよ。

《二日目》

今日も学校は休みだ。

午前中からログインした俺と佐和は、昨日選んだ武器を持ち、訓練場の力カシの前に立っていた。

「佐和のオノは、主要スキルは『剣術』だよな。俺のコレ、何だろ？」

俺は昨日選んだ武器をまじまじと見つめた。

長い鎖の先端に直径五十センチほどの円形の金属の板が括り付けられた、鎖鎌に似た姿形の武器。

きつと、人気無いだろ。こんなの取り合いになるコト何てないハ

ズだ。予定よりちょっと重いけど、その分リーチが長いから良しとしようか。

この武器はミラさんからのメールに詳細が書かれていないんだよな。三角コーナーのネットも、栓抜きもあったのに、コレが無いのは何故だ……。

「ヨシムネ、それどうやってツカウの？」

「鎖の部分を持って板をブンブン振り回したり、投げつけたりするんだと思うんだけど……。ちょっとやってみようか」

俺は鎖の部分を両手で持ち、金属板をぐるぐる回して勢いをつけ、カカシ目掛けて放り投げた。

「……アレッ」

スカッ、……外した。結構難しいぞ、コレ。

鎖を手繰り寄せて再びチャレンジ。今度はゆっくり狙いを定めてふわりと投げつけてみた。

「おっ！」

今度は命中。カカシだから当たったものの、こんな速度じゃ避けられて終わりだよな。もう少し慣れないとダメだな。

佐和は隣のカカシに接近してオノを振り回していた。

「アハハ！ アハハハハ！ ハハハハハ！ ハハ、げほげほ」

その様、竜巻。

テンション上がりすぎてむせてたけど、没頭してくれているようだからちょうどイイ。俺もガンバってスキル上げに励むとしよう。

一時間後。

いやあ、投げた投げた。止まっているマトになら八割は当てられるようになったぞ。そろそろスキルも少しは上がっただろう。どれ、チェックしてみるか。

スキル

- ・ 盾投 14
- ・ 薬草発見 8
- ・ 採取 4
- ・ 回避 4

「盾……投げ……！？」

ニツチなスキルが上がっていた。

ああ、この金属板、これ、盾か！ リュリュさん、盾に鎖つけちゃったかー。

でもレベルは上がったぞ。スキルの総計でレベルが上がるんだな。ヘルスは上がっているけど、マナは上がってないなあ。どうしてだろ？ 後で少し調べてみるとするか。

「佐和、疲れた……」

佐和は、はしやぎすぎたのかオノを抱え込み、地べたにあぐらをかいていた。セーラー服であぐらとか、パンツ見えるぞ。

「大丈夫か？」

疲れ果てていた佐和は虚ろな瞳を俺に向けた。応えるように、よろよろとオノを杖代わりにして立ち上がる。

「よよ……」

しかし、足に力が入らなかったのか俺にもたれかかってくる。

「よしよし、がんばったな」

受け止めて、撫でてやった。スキルもいいペースで上がってるし、ここらで少し休憩した方がいいなこれは。無理しても良くないし。酒場へ行つて飲み物でも飲みながらしばらく休んで………続きはそれからしよう。

その後、休憩を終え、ミラさんに言われたよりも長くカカシ相手にトレーニングしたが、スキル値が22を超えたあたりから上昇速度が格段に落ち、25からはぴくりとも上がらなくなってしまった。カカシ相手ではこれが限界なんだろう。そうだな、カカシ相手にスキル値を最大にできるんだったら、みんなカカシ殴りまくるよな。

佐和のスキルもカカシでの上限に達したらしく、続きは明日に、というコトになった。

言われた以上に『宿題』も進んだ。まだ二人は戻っていないようだけれど、今日中には戻ると言っていたし、明日になれば会えるだろう。

《三日目》

「くそ、きつと何かあったんだ！」

授業を終え、いつもの様にそのまま『EWO』にログインした俺達は、まだ戻らないミラさんとリユさんに言い知れぬ不安を抱いていた。

フレンドリストを確認する。二人の居るエリア名が表示されているが、そのエリアが安全なのかそうでないのか区別がつかない。もし、二人の身に何かあって、危険なエリアから身動きが取れないとしたら……。

出発前のリユさんにあんな話を聞いたせいで、不安は募る一方だ。

「……そうだ、メールで確認を」

「ヨシムネ、だめ」

メールが送信できるコトを思い出した俺は、安否確認をしようとしたが……、佐和にそれを制止された。

「あっちから連絡がないなら、佐和達にできるコト、『ぴろりん』なんてナイ」

着信音みたいなのが途中で聞こえたが、気のせいだろう。

「佐和とヨシムネに今できるコトは、少しでもツヨクなるコト……
『ぴろりん』」

佐和も二ガ虫をカミつぶした様な顔つきでメニュー画面を開いて何か打ち込んでいる。ああ言っているにも、何かしていないと不安なんだろうな。

「……そうだな。強くなるうな……二人の力になれるくらいに……！」

「うん、がんばる！」
『ぴろりん』

……。

「佐和、さっきから着信音みたいなの鳴ってないか？」

「ヨシムネ……、おっぱいとムニューが心配なのはわかるケド……」
佐和はそう言って目を伏せ、小さく首を振った。

まさか、幻聴？ これは心配し過ぎて聞こえた幻聴なのか？ 俺の心が弱いばかりに、佐和にまで余計な心配をさせてしまった……！
「すまなかった！ 二人を信じて、俺達は少しでも強くなるう！」

俺の言葉に佐和はメニュー画面をいじくりまわしながら、笑顔で頷いたんだ。

そうと決まれば、さっそく昨日の続きをしよう。

昨日の晩、攻略サイトで気になっていた部分を帰った後に家で確認してみたところ……。

- ・スキル値の総計でレベルが決定する
- ・レベルが上がると次のレベルまでの必要スキル値は上昇する
- ・レベルが上がるとステータスポイントが貰える
- ・各スキルには対応するステータスがあり、そのステータスにボーナスポイントを割り振る事でスキルの効果にボーナスがつく

……と、言う事らしい。ちなみにヘルスはレベルアップでも上昇

するけど、マナは対応するステータスにポイントを割り振るか、マナに関わりのあるスキルを上げないと上昇しないそうさ。

例外が、『レベル2になった時にだけはマナが5上昇する』。

この5マナっていうのは、帰還用のアイテムを使用するのに必要なマナコストと同等だとか。

本当ならチュートリアルクエストの過程で、レベルが上昇し、マナも上昇、さあ、帰還用のアイテムを試しに使ってみよう。というフェーズがあったようなんだけど……。

チュートリアルをキャンセルしたからそのアイテム、貰えていないんですけどね。

スキルを広く浅く育てていけば、その分、レベルは稼げるけど、『レベル制限のあるダンジョンやクエスト、対人戦場』に参加できなくなってしまうようだ。

各コンテンツはレベルで制限がかかるので、自分のレベルに見合ったクエストを請けようとした結果……、『十種類のスキルを10ポイントずつ持つプレイヤーと、一つのスキル値100のプレイヤーの討伐対象が同じ』なんて事になりかねない。

一つのスキル値が100の方がイイとは言いきれないけど、10じゃヘタをするとその討伐対象にダメージを入れる事すらできないかもしれない。

そこまで極端な例は少ないようだけど、不用意に多数のスキルを上げるのは控えた方がよさそうさ。前にミラさんが言っていた『多くのスキルを育てるデメリット』ってのは、これの事かな。

まあ、レベルもスキルもステータスも『リセット、もしくは緩やかに下降設定』、という救済策があるようなので、気になり始めたら詳しく調べてみる事にしよう。

それを踏まえて……。

俺はメニューからステータスの項目を開いた。

《Attribute》
《Offence》
《Defence》

開いた途端に分岐しやがった。以前、試しに見てみた時は、この時点で理解するのが面倒になってメニューを閉じたんだった。……自分のコトながら、ダメすぎるにもホドがある……。今回は諦めるワケにはいかないし、がんばるとしよう。

しかし、三種類もあるのか。詳細までは調べ切れていないぞ……。けど何となく名前から想像できるかな。

アトリビュートってのが、アトリビュートなんだろう。オフエンスってというのがオフエンスで、ディフェンスがディフェンスなんだ。間違いない。

……一番上から見てみるか。

《1》

【Strength】
【Stamina】
【Agility】
【Intellect】
【Spirit】

アトリビュートってのは四つか。これは本当にわかるぞ。他のゲームでも見覚えのあるモノが多いし。

ストレングスは『力』、スタミナが『体力』、アジリティが『俊敏性』、インテレクトが『知性』で、スピリットが『精神力』だな。日本語にすると、効果も何となくわかってくる気がするな。

ストレングスは武器を使う戦闘に必要な値で、スタミナがヘルス

にボーナスを加える値ってところか。アジリティは回避率とか、命中率とかに関係してるっぽい。インテレクトは魔法ダメージ、スピリットは回復魔法の強さに影響するんだろう。インテレクトとスピリットは、マナにボーナスがつくかもしれない。とにかく、両方とも魔法に深い関わりのある数値である事は間違いない。

上の　　とか　　が、ボーナスポイントかな？

多分、　　が五つで　　になって、　　はステータスに割り振れるんだろう。

レベルアップの恩恵なのか、　　が一つ余ってるな。どこかに割り振っておくか。

……メインスキルにボーナスがつくステータスの　　を伸ばしていくのがいいんだろうけど……。

盾投って、何を上げればボーナスがつくんだよ……。一応、物理攻撃だから、ストレンジスを上げておけばいいのかな。わからないけど、リセットが効くなら、余らせておくのは勿体無いだろうし、ストレンジスに振っておこう。

「さて……」

ポイントの振り分けを終えた俺は、同じくなんらかのステータスを強化した佐和と、この後の相談をするコトにした。

「どうしようか？　　佐和は何かしたいコトある？」

「佐和、お店まわりたい」

そうか。使用する武器も決まったコトだし、それに合わせて防具も変えないとな。特に佐和は超近接武器だから、そんなセーラー服じゃ反撃が来たとき、ひとたまりもないだろう。トレース時に着ている装備は初期装備扱いになって、防御力はスズメのナミダらしいし。もっと防御力の高いモノにしないと。

とは言え、あんまりお金無いから、ウィンドウショッピングになりそうだな。

……。

案の定、手が届きませんでしたとさ。

二人と別れて過ごした三日間の報告を終えた俺達にミラさんは優しく微笑んだ。

「宿題、キチンとしたのね。エライ、エライ」

う……。やっぱりこのヒト、すごい美人。見つめられただけで顔が火照ってくる。

俺は赤くなつた顔を隠すように、机に置かれていた木製のマグカップを口に近づけて傾けた。

だって、こんな美人に微笑みかけられるなんて現実じゃ経験ないから気恥ずかしくてさ……。

「ムカツ、とーん！」

「ブほっ！」

佐和が突然俺の飲んでいるマグカップの尻を持ち上げやがった。

おかげで鼻に中身が……。

俺は佐和に、一言文句を叫ぼうとしたがそれどころじゃない。

「がふっ！ がふっ！」

イテエ！ 鼻の奥がツーンとする！

「ほら、ヨシムネ、鼻からジュース。カッコ悪いよね？ ね、ね？」

佐和は必死に俺の顔を掴んで二人に見せつけている。

やめろ、恥ずかしいだろ！ 今、鼻からジュース出てんだ！ お前のせいだ！

「た、大変……」

リュリユさんが懷から取りだした布の切れ端を俺の顔にあてて、ジュースを拭き取ってくれた。佐和と違って、優しいなあ。

「むーっ！」

その様子をみて、激怒する佐和。待て、おかしいだろ！ お前ちよつと俺に謝れ！

そんな騒ぎをよそに、ミラさんが思い出したように口を開いた。
「そういえば、初級のクエストラインで、全部終わると防具が一式もらえるのがあったハズよ。結構長いクエストになるけど、今日はそれ、はじめてみる？」

「それ、ぜひ！」

即断即決。クエストの練習にもなるし、お金をかけずに装備交換できるなんて、願ったり叶ったりだ。

怒っていた佐和もそれを聞き、とうとう服を着替えられる見込みが出てきたのがウレシイのか、自分の服とミラさん達のファンタジーな服装とを見比べて少し照れくさそうにしている。

「よし、じゃあさっそく行ってみようか」

ミラさんのその言葉を合図にするように、俺達は木製マグカップに注がれたジュースを一気に飲み干し立ち上がった。

クエストの受注は、酒場内だ。カウンターのマスターは『凄』クエストばかりだから、無視。

初級は酒場の一番隅っこの机に居るボロボロのローブを着込んだNPCからの受注になる。

俺がそのNPCの前でミラさんから狙いのクエストを教えてもらっている、リュリユさんが佐和にかけた言葉が耳に入ってきた。

「そうだ。佐和ちゃん。昨日、心配のメール……、ありがとうね？」

……おや？

その6

「よし、おネエさん達は、ココまでかな」

いくつかある村の出口の一つまでやってきた俺達にミラさんが足を止めて言った。

クエストの攻略自体は自力で、という事らしい。

頼めばきつと手伝ってくれるだろうし、ミラさん達にかかれれば、こんな初級クエストなんて楽勝でクリアできちゃうんだろう。

でも、ミラさんはただでさえ頼りっぱなしで情けない初心者以下の俺達に汚名を返上するチャンスをくれたんだ。これは期待に応えなければ。

「このまま真つ直ぐ進んで行けば、クエスト開始地点の『コー・フアーム』に辿り着くわ」

ミラさんは目的地の方角を指差して、そう教えてくれた。

「結構長いクエストだから、全部一日で終わらせようと思っちゃダメよ？」

「わかりました。ありがとうございます」

頷きながらお礼をする俺の襟もとにミラさんは手を延ばして正し、次いで佐和の襟もともキレイに整える。

「はー。だいじょうぶかしら。弟と妹の旅立ちを見守る気分だわ」

弟と、……妹……？

まあそれはともかく、俺達はミラさんとリュリユさんの心遣いに感謝しつつ、いよいよ出発を！

「力カシと違って、攻撃してくる敵とかも出るからツラくなったらいつでも戻ってくるのよ？ いい？」

……俺達、そんなに頼りないかな……。頼りないんだろうなあ……。

いいさ。これから挽回していくんだ。まずは、このクエストを何としても成功させてみせるぞ。

二人に（一時的に）別れを告げ、村から出ると、森の中へ向かって一本の道がのびていた。木々はそう多くなく、適度に日がさす、美しい森だ。モンスターと思しき影も見当たらず、小鳥のさえずりと、小川のせせらぎが……。

見覚えがあるなココ。初心者エリアのコピーといったところか。流石は初級エリアだ。

村の中にはプレイヤーも多かったが、これから俺達ができるクエストは初級クエストだけあってもう終えてるヒトばかりらしく『コー・ファーム』へ向かう人影は全くと言っていいほど無い。モンスターも見当たらないから、狩りをしているプレイヤーも居ないし。

「平和だなあ」

そんなコトバが漏れるほど長閑な森の中、観光気分の俺の隣で佐和がぼつりと呟いた。

「佐和、お姉ちゃんってコトバきらい」

佐和には姉と妹が居た。佐和は姉をお姉ちゃんと呼び、妹は何故か佐和をお姉ちゃんと呼んだ。

そんな二人は、今はもう居ない。佐和はその二人を思い出させる『お姉ちゃん』というコトバがキライなのだろう。思えば、前に不機嫌になった時もそれが関係していたのかもしれない。

「佐和……」

眉をたらしすすっかり小さくなってしまった佐和を引き寄せて慰めるように頭を撫でてやると、そのまま甘えるようにもたれかかってきた。

「よよ……」

二人を思い出しているんだな。佐和の気分が紛れるならいくらでも胸を貸してやるさ。

「ライ、お主ら」

「佐和、ツライ時はいつでも言うんだぞ？」

「ヨシムネ、ありがと、ね」

「ライ！　ちよつと、お主ら聞けよ！」

オーバーオールに麦わら帽子、ピッチフォークを持った屈強な中年のおっさんが涙目でこちらに向かって叫んでいた。

……。ああ、ファームの方ですか。どう見てもそうですね。何時の間にか『コー・ファーム』に到着していた模様。

「お主ら、ワシの依頼を請けた者たちじゃろう？」

どうやらこのおっさんがクエストのNPCらしい。

コー・ファームは小さいながら立派な農場だった。畑に納屋、後はおっさんとおっさんの一家が住んでいると思われる母屋がある。よき田舎の農家ってカンジだ。

おっさんは俺達を畑まで案内すると、柵の門を開けて中に入るよう促した。

畑には緑のツルの生えた巨大なカボチャがたくさん実っていた。小さい物で五十センチ、大きい物になると二メートルを超える巨大さだ。

不思議なカボチャだった。形は普通のカボチャと変わらないのに、ハロウインのジャックオランタンの様に顔の模様がついていたんだ。彫ったワケじゃなさそうだ。これは元々そういうヤサイなんだろう。その不思議な巨大カボチャについて、手が伸びる。確かめるように顔の模様をなぞっていると、おっさんが口を開いた。

「立派じゃろ？　ワシが丹精込めて育てた『カヴォチャ』じゃ」

カヴォチャっていうのか。カボチャとは微妙に違うんだな。

しかし、確かに。おっさんの言う通り、そのどれもこれもが、ぎゅっと身の詰まった水々しいモノだった。食べたコトの無いヤサイなのに、これは本当にウマそうだと、心からそう思った。

「ええ、スゴイ立派です。ホント、ウマそう」

おっさんは俺のコトバを聞き、誇らしげに胸を張り、大きく頷き微笑んだ。

それだけでカヴォチャにかける愛情が深いモノだと伝わってきた。

けど、そんなおっさんの顔はみるみるうちにイカリに染まっていたんだ。

「そんなワシの大切なカヴオチャを、毎夜毎夜盗んでいくフトドキモノがおるのじゃ！」

おっさんは吐き出しはじめたイカリを抑えるコト無く続けた。

「二日前の晩はキャサリンが！ 昨晩はジョージが持っていた！ 次、狙われるはおそらくトマス……！ それは阻止せねば！

そこで、お主らには盗っ人を捕らえて欲しいのじゃ！」

ナルホド。夜まで張り込んで、犯人を捕まえればクエスト成功でトマスが持っていたらクエスト失敗になるのかな。

っていうか、名前付けてんのか……。どれだよ、トマス……。

これは、犯人と戦闘になるのかもしれないな。しっかりと武器を準備しておこう。

佐和もクエストを理解したのか、オノを取り出し撫ではじめた。

「ぐふふ、ぐふ、ぐふふふ」

うわっ……。聞くまでもなく、準備は万端だな。

「夜まで時間を潰すつもりなら、その納屋で休んでいてくれても構わん。なんとしても犯人を捕まえてくれ！」

ああ、実際に夜まで待つ必要は無いのか。多分、納屋に入ればクエストスタートになるんだろう。

そりゃそっか。いくらなんでもリアルタイムだと一般人にはキツすぎる。

「佐和、お言葉に甘えてちよつと小屋で時間潰そうか」

それを聞いた佐和は大喜びでオノを放り投げ、納屋へと向かって俺の腕をグイグイと引っ張った。

「違うから！ そういうんじゃないから！ 佐和さん落ち着いて！ ちゃんと武器持って、おちつ」

「ハアハア」

クエストは興奮する佐和をなだめるコトから始まった。

納屋に入ると、ポップアップウィンドウにクエストを開始するかどうかを尋ねる選択肢が表示された。

佐和も落ち着きを取り戻したようだし、『開始』を選択。

その途端、太陽が沈み、代わりに月が昇る。月はぼんやりとあたりを照らし、闇夜にわずかに光をもたらした。

あれ程聞こえていた小鳥のさえずりは消え、代わりにフクロウの鳴き声が耳に入るようになる。

おっさんも母屋に戻ったのか、農場から姿を消していた。

まるで映像記録の早送り中にあるような感覚だった。

「一瞬で夜だな」

俺と佐和は武器をしつかりと背中に背負い、無駄な音が鳴らないようにぎゅっと固定した。張り込んでる最中に、音でバレるとか間抜けだしな。

納屋から外へ出てカヴオチャに身を隠し、じいっと待つ。

フクロウと虫の鳴き声をBGMに、数分。

草をかき分けるガサガサという音が聞こえてきたかと思うと、柵の外に影が現れた。

影はそのままゆっくりと柵を乗り越え、畑へと侵入し、カヴオチャへと歩み寄った。

間違いなくあれが犯人だろう。いくらか月明かりが辺りを照らしているとはいえ、顔までは確認できないが……。

（一人！ しかも、小さい。コドモか……？）

「ごはん、ごはん」

犯人はカヴオチャを盗み出そうと必死なようだ。両手でツルを引きちぎろうとしているので、武器も手にしていない。

これは、チャンスだろう。

「かたい、かたい」

犯人はトマスのツルに手こずっておられる様子。背おった鎖盾（仮）に手を伸ばし、考える。

（盾、投げ……は、少し遠いな。当たるかどうかもビミョウだし、ここは近づいて……）

佐和に視線を送る。佐和も同じコトを考えていたのか、無言でコクリと頷いた。

暗がりの中、カヴォチャの影から影に移動し、犯人へと近づいていく。

二つ、三つと息を潜め進んで行き、ボーダーラインと思われるカヴォチャで一度ストップし、佐和に手振りで今後の動きを伝えた。それを見た佐和はふるふるすると首を振って、自分のコメカミをちょいちよいと人差し指で叩く。

ああ、ささやきチャット、効くんですね。こういう場合は便利だなこれ……。

なら、伝わっただろう。

風が吹いて、雲が流れた。流れた雲は月を隠す。

月光が雲で遮られた……と、同時！ 俺と佐和は左右に別れ、カヴォチャの影から犯人めがけて地面を蹴った。

「いやっほー！ ウンジャマらみー！」

一言一句間違わず、伝わってる！

犯人が気づき、振り向いた……が、バカめ！ かかったな！

そっちは、ウザスタイリッシュに声をあげた佐和の方向だ！

本命はこっち。俺は身をかめたまま死角から犯人めがけて飛びかかった。

犯人と体がぶつかる。ここで、ビクともしないようじゃきつと勝ち目はないだろう。

けど。

（コイツは……）

軽い！ 俺の力だけでも充分に転ばせられるぞ、コイツ！

「イよいしょー！」

いけると踏んだ俺はそのまま犯人を地面に押し倒し、のしかかり、自由を奪う。

「あわわ、あわわ」

組み伏せられた犯人はジタバタともがいて逃げだそうとしていたが、やはりあまり力は強くないのか、やがて観念したように動かなくなってしまった。

「おmoi、おmoi」

俺は鎖盾の鎖を巻きつけて犯人を縛り上げた。

「よし！」

「ヨシムネ、まわり！」

捕縛は成功したが、いつの間にか回りを同じ背格好の影に囲まれていた。

ぱつと確認できるだけでも三人以上！ 隠れてたのか！

よく考えればわかりそうなモノ。こんなに巨大な力ヴオチャをコイツ一人で運べるワケがない。仲間がいるに決まってたんだ！ その上……。

（武器、巻きつけちゃった！ 丸腰！）

マズい！ 予備武器なんて持ってない！ ミスしまくりだ！

佐和は背おつていたオノを持ち、俺をかばうように前に出て構えると、大きく息を吸い込んだ。

どうするつもりだ！

「こらー！ やんのかー！」

うおおお……。なんだそれ……。もしかして、威嚇か？ 全然コワくない。三流以下の威嚇だろコレ！

「あわわ、あわわ」

「ごめん、ごめん」

「まって、まって」

ええええ、効果観面！？

俺達を取り囲んでいた影は慌て、ただおろおろするばかりだった。

襲ってくる気配はない。

「むふー！ 佐和にビビった！」

目をらんらんとさせて、得意げな佐和にはワルイけど、あんな威嚇が効いたとは考えにくい。なのに襲ってこないってコトは……。こいつらもしかして元々、戦意が無い……？

そんなコトを考えていると、おおーい、と俺達を呼ぶ声が農場に響いた。聞き覚えのある声だ。

「捕らえたのかー！？」

騒ぎを聞きつけたのか、おっさんが母屋から寝巻き姿のままランブだけを手に飛び出してきたらしい。

「あわわ、あわわ」

「ごめん、ごはん」

わたわたと慌てフタめくだけの影を無視し、おっさんは俺が組み伏せている犯人にランプの光をあてた。その時に俺達は始めて犯人の顔を目にしたんだ。

オーバーオールを着た、毛むくじやら三頭身のタヌキのような生き物。俺達を見上げるくりくりの丸い黒い瞳には涙が溢れていて、今にもこぼれ落ちそうだ。コドモじゃなかったな。モンスターか。

「ごめん、ごめん」

ああ、こぼれた。ぼろっぼろと涙を流してそいつは謝罪を続ける。なんだか悪い奴には見えないな……。

おっさんはそんな犯人を見て大きなため息をついたあとに言った。

「……全員、ウチへ入れ。そこで慌ててる、お前らもじゃ」

「ほかにもいるんじやろう？ 全員、呼べ」

おっさんのその一言で、一匹が呼びに行ったかと思うと、来るわ、来るわ。

その数、総勢十二匹。大きいのが五匹に、小さいのが七匹だ。大

きいと言つても背丈は俺の腰ほどまでしかなく、小さいのに至つては、膝まであるかどうかという小人ぶり。

おっさんはその全てを母屋へ招待した。母屋は中々の広さだったが、小さい方のタヌキもどき達が大はしゃぎで走り回っているせいでせまつくろしくて仕方ない！

「おうち、おうち」

「うれし、うれし」

「これ、無理があるんじゃない？」

足元を走り回られているせいで、うかつに動くと踏みつけてしまいそうだ。

「アハハハハ！ アハハハハハハ！」

佐和はタヌキもどきの子供を一匹捕まえて、顔を擦り付けふもふな毛を堪能している。幸せそうだなあ。堪能されているタヌキもどきは怯えて震えているがな。

「ぬうツ！ 止むを得まい！ 子どもは納屋へ移動じゃ！ おおい！」

おっさんが叫ぶと、奥の部屋から中年の女性が出てきた。おっさんとお揃いの色の寝巻きを着ているトコロを見るに、多分、奥さんなんだろう。

「あらあら、どうも賑やかですこと」

「すまんが、お前、子供らを納屋で寝かしつけてやってくれんか？」

ああ、それと……」

おっさんは奥さんを手招きで呼び寄せ、何かを耳打ちした。

「はいはい、わかりました。さあ、みんな。こっちへいらっしやい」
何を伝えられたのかは俺達には聞こえなかったが、奥さんはそれを了解して、タヌキもどきの中でも小さい連中……子供らを呼び寄せた。

タヌキもどきの子供達は奥さんの指示にぴっちり従い、整列。聞き分けのイイ子達だな。

「パパと、ママに」

「ないと、ないと」

「ぐつど、ないと」

子供達は大人達へのオヤスミナサイを終えると、奥さんに連れられて母屋を後にした。佐和に捕まっていた一匹も、他の子供が出て行くのを目にした途端、大急ぎで佐和を振りほどき後を追った。

「あああああ！」

佐和は遠ざかるタヌキもどきの後ろ姿を見つめて届かぬ手を伸ばす。佐和。あの状態を、『大逃げ』と言った。心の底から、イヤがっていた場合に起こる状態なんだぞ？

「よよよ……」

悲しみにくれる佐和は、俺にもたれかかってきて、さめざめと泣いた。はあ、よしよし。

そんなコトより、気になる事が一つ。おっさん、コイツらのコトを知っているような口ぶりなんだよな。さつきから。

おっさんは俺の視線に気付いたのか、大きなため息を一つ吐いて、説明を始めた。

この二足歩行の着衣タヌキどもは、『コボルト』という種族らしい。

各地域で気性に差はあるが、この地域のコボルト達は昔から農家、鍛冶屋との交流が深いとか。

それというのも、彼らコボルト達は、こと採掘に関しては右に出る者が無いほどの働き者だそうさ。

コボルト達は、鉱石を掘り、農家へ持って行き食料と、鍛冶屋に持って行き採掘道具と、それぞれ交換する。鍛冶屋には、コボルトの持つてくる質のいい鉱石は大変喜ばれ、農家にとっても農具を作るための素材としてありがたがられていた。

「ワシが普段使っている、クワもフォークも、コイツらが持つてきてくれた鉱石で作ったんじゃない」

その関係は今も続いていた、ハズが。近頃はぱったりと彼らを見

かけなくなつたとか。

それからしばらくして、畑に窃盜被害が出始めた。

……このおっさん、犯人の目星、ついてやがったな……。

だから『犯人の退治』ではなく、『犯人の捕獲』なんて依頼にしたらんたろう。

なぜ、盗みなどしているのか、その理由を聞くために。

「しかし、倍はいたハズじゃが。残りは、どうした？」

その質問に、コボルト達は悲しそうな表情を浮かべて言った。

「くもが、くもが」

「なかま、なかま」

「たべた、たべた」

片言過ぎて理解に時間がかかったけれど、俺達は彼らの現状をなんとか把握するコトができた。

コボルト達の住んでいた鉱山にある日、突然やってきた巨大なクモ。そのクモは鉱山に住み着き、コボルトをエサにして、繁殖をはじめた。

採掘道具を武器にして、抵抗していたコボルト達だったが、日に日に増えていくクモには勝てなかった。

多くが犠牲になり、辛うじて生き残ったコボルト達も鉱山を追いやられ、『ごはん』の代わりが支払えなくなり、とうとう盗みに手を染めたそうだ。

「おなか、へった」

「だから、ないの」

「はらえ、ないの」

なるほど。あんまり食べてないのか。だから押さえつけた時に非力だったんだな。

「お前ら、ワシを侮るなよ！」

コボルト達の説明が終わると、おっさんは顔を赤くして、怒鳴った。

「ワシはな、お前らがカヴォチャを盗んだのを怒っているのではない。大事なカヴォチャを食べて、感想も！ ウマそうな顔も！ ひつつも見せやしないコトに腹を立てておるのじゃ！」

おっさんの意外な方向への怒りに、コボルト達はまんまるい瞳をもっとまんまるくして呆気にとられている。

「そもそも、なぜ、サッサとココに来なかった！ お前らの二十四や、三十匹、ワシが面倒みてやるわい！」

…… ああ、ナルホド。このおっさん、超お人好しなのか。

「さあさ、お話が終わったなら、食べなさいな」

話が終わると、奥さんが木のお皿を運んできた。終わるのまで待つてくれたのかな。

奥さんの持った木のお皿には一杯の果実が盛られていた。一口大に切り分けられたオレンジの果実だ。

「ワシ、自慢のカヴォチャじゃよ」

うおお。美味しそう。名前からヤサイの仲間だと思ったのに、果物みたいだ。

「モチロン、お主らの分もあるぞ」

おっさんが俺達を見てそう言ったのを聞いた瞬間、つい小さくガツツポーズが出ちまった！

「ぐふふ、ぐふふふ」

…… 不覚にも佐和に見られた模様。イイじゃん。美味そうだったんだからさ。食べてみたかったんだよ。自分だって嬉しそうじゃん。小さく喜ぶ俺達とは対象的に、コボルト達は何かを気にするようにオロオロとしている。

時折、お皿のカヴォチャに目をやってお腹を鳴らしているトコロを見ると、空腹ではあるんだろう。

「子供達もお腹いっぱいになったら、眠くなつたみたいですよ」

奥さんからそう言われると、コボルト達はホッとしたような表情を浮かべた。

「ありが、ありが」

「ありが、ありが」

子供の食事を気にしていたのか。そっか。自分達だけ食べるわけにはいかないもんな。

しかし、おっさんのさっきの耳打ちは子供達にも食事を摂らせるように言ったのか？ 気配りのきいてるおっさんだなあ。お人好しだから、気配りができるのか？

その後の、心配が無くなり、遠慮も無くなったコボルト達との戦いは激しいものだった。

長く激しい戦い。おっさんと奥さんからの追加援助物資がなければ乗り切れなかっただろう。

ホント美味しかった。もう、お腹いっぱい。

大人コボルト達も満腹し、子供と同じトコロでの就寝を希望。

「全員となると、納屋は少し狭いが構わんか？」

コクコクとコボルト達は頷き、おっさんに案内されて納屋へと向かった。

ヒトが一気に減ったせいか、急に静かになったな。

静かになった母屋の中でぼんやりと光るランプが寂しさを更に加速させる。パーティが終わったみたいで寂しい。

「貴方達も今日はココに泊まっていきなさいな」

そんな俺達に向かって、奥さんは二階を指差して言った。

あ、宿屋の代わりに部屋を借りれるのか。長いクエストライン、一息でクリアは流石に厳しい。

ここで一区切りできるようになってるんだな。

そろそろログアウトしないとダメな時間だし、丁度いい。お言葉に甘えるコトにしよう。

「佐和、帰る前にもう一度、モフモフ見たい」

こっそりと納屋を覗くと、そこには藁の上で眠るコボルト達がいるた。

根本的な解決にはなっていないけれど、一先ず気苦労から開放されたのか、さつき別れたばかりの大人コボルトも、もう眠っている。子供達をぎゅっと抱きしめて、夢の中でも守るように。

「ハアハア」

人形が人形を抱いて眠っているようで、微笑ましいカンジ。それを確認した俺は、隣で息を荒げている変態にリーチのかかった佐和を引きずりながら納屋を後にした。

ログアウトするために、二階の一室を借りようと母屋に戻った俺達は、妻に頭を下げるおっさんを目にした。う、修羅場？ 盗み見するツモリはなかったんです！ スイマセン！

「スマン。急に超大所帯になっちまったよ。生活、キビしくなるなあ。お前には迷惑をかける……」

「頭を上げてくださいな。土とクワさえあれば、生きていきますよ」
おっさんがお人好し、そう言ったけど、違った。

「それに、あの子達を見ていると、諦めていた子供が出来たようで、少し嬉しいんですよ」

おっさんだけじゃなく、奥さんも、超お人好しなんだ。

でも、二人とも超カッコイイ。

……それから、一杯食べてゴメンナサイ。

何となく気まずくて、二人に見つからないように寝室へ向かいながらそう思った。

その7

盗っ人の正体は、コボルトでした。農場のおっさんは、コボルト達を哀れに思い引き取りました。コボルト達は、農作業の手伝いをしながら、おっさんと奥さんと共に、末長く暮らしましたとさ。

なんて、そんなワケ無いよな。

次の日、いつものようにログインして、階下へ降りるとおっさんが机の前で頭を抱えていた。

「バカどもめが……」

そうつぶやくおっさんの後ろには、大人のコボルトが整列していて、重苦しい雰囲気だった。

これは……。『クモを退治してきてくれ』とか、『退治を手伝ってくれ』とか、そんな類の話を切り出される気がするぞ。

そんなコトは気にもせず、佐和は心ここにあらずなカンジにそわそわしている。部屋にある窓から外を気にしているようだけど……。こりや違うな、外じゃない。納屋だな。更に言えば、納屋の中にいるであろう子供コボルトのもふもふ毛を気にしているんだ。間違いない。

「いいよ、行つて来て」

俺がため息混じりにそう言うと、佐和は、ぱあと満面の笑みを浮かべ、外への扉に向かって駆けて行った。扉から表へ出る前にこちらを向いて、もう一度嬉しそうに微笑む。

そこまでか。そこまで嬉しかったか。そんなに気持ちいいのか、こいつらのもふもふ毛は。

あまりにも食いつきのイイ佐和を見ていたら俺も試したくなってきたしまった。しかし、俺も納屋に向かうなんてワケにはいかない。ここで話を聞かねば。

試すとしたら、目の前の彼らで！ だが、彼らは大人のコボルト

だ。もふもふされた時の屈辱感子供の比ではないだろう。ガマンするのだ、耐えるのだ。

……イヤマテ……。ちょっとダメなら大丈夫なんじゃないか……？
そんな誘惑に負けて、俺は手をわきわきとさせながらコボルト達へと向き直った。

そこには、先ほどと変わらず、重苦しい雰囲気のコボルト達が！
マズい。ふざけられるような雰囲気ではないぞ。

「と、ところで、何かあったんですか？」

「コイツらが、『仲間のカタキを討ちにいく』と言ってキカンのじや」

やっぱりそうか。それを俺達に手伝えっていうのがクエストライ
ンの続きなんだろう。

「しかし、コイツらだけでは間違いなくイヌ死にじゃと言っに……」

クモか。クモね……。

鉦山つてコトは、坑道での戦いになる確率が高い。暗い上に、足
場もイイものではないだろう。

通路は狭いところもあるかもしれない。

盾投げできるかな……。盾投げ、あんまり役に立ってない気がするな。コボルト捕まえた時も投げなかったし。

でも、鎖は役に立った！ 巻いたせいで丸腰になっちゃったけど。
予備の武器を何か持っておいた方がいいなコレは。

鎖盾自体も、もう少し効果的な使い方を考えないといけないかも
しれない。

「かたき、てつだ」

「おねが、おねが」

コボルト達の声で我に返る。

おねが？ ああ、『お願い』か。

どうやら考え込んでいるうちに話が進み、クモ退治の手伝いを頼

まれていたようだ。

「お主らが同行するというのがなら、心強い。ワシからも頼む。コボルト達の力になってやってくれ」

おっさんの言葉と共に目の前に選択肢が、

・ Accept (いいですとも！

・ Accept (いいですとも！

ええええ！ どういうコト！？ 聞く必要ないだろコレ！

選択肢の選択しなさに狼狽していると、コボルト達は何時の間に
か俺を取り囲み、じりじりとにじり寄ってきた。

「おねが、おねが」

「おねが、おねが」

じりじり……。

何々なんなの！？ なんで襲ってきそうな雰囲気なの！？ バグ
ってんの！？

「ぐ、チクシヨウ、ただじゃやられん、ぎゃー！」

ただならぬ雰囲気には危険を感じた俺は鎖盾に手をかけた、が、ヤ
ツらの動きは早かった。盾を構える間もなく飛びかかれ、イイよ
うによじ登られ、その重さに耐えきれず、バランスを崩し、地面に
うつ伏せに倒れてしまう。

「ぐ……」

痛くはないが、思わず漏れる呻き。

「ちくしょう、なんだってんだ」

悪態をつきつつ倒れたままに視線を上げると、そこには黒い鉱石
を高く掲げた一匹のコボルトが！

「おねが……、おねが……！」

ヒイイ、殴るのか！ それで殴るのか！ もしかして、畑で組み
伏せたコト、怒ってるのか！？

「ぎゃわああああ！」

「おうち、うれし」

「うれし、うれし」

幼いコボルト達は久しぶりの屋根のある寝床が余程嬉しかったのか、たいして広くもない納屋を駆け回っている。騒々しい納屋の中、窓から射す光が舞い上がる埃の動きを映しだす。

佐和はそ中で一番毛並みの良さそうなコボルトを捕まえ、抱きかかえていた。

土がむき出しの床にぺたりと座り込み、あぐらをかきつつ、コボルトのてんこに顎を乗せ、幸せそうに微笑んでいる。捕まっているコボルトはすでに観念しているのか昨日とは違い、暴れるそぶりもない。

「はー。お前、よかったな。また、パパとママとオウチで暮らせて」

佐和の言葉に、コボルトはこくこくと頷く。

「よかった、よかった」

「でもね、でもね」

「ぼくの、ほんと」

「パパと、ママは」

「クモが、たべた」

佐和は沈黙したまま、コボルトの吐き出す言葉を聞いていた。その顔に、笑顔はもう無い。

幼いコボルトは一度、口をきゅっと結び、瞳に溜まった涙がこぼれないように耐える。

「パパと、ママが」

「ぼくを、かばう」

「くもが、ふたり」

「たべた、たべた」

佐和はゆつくりと慰めるようにコボルトの頭を撫でた。母のように。

コボルトはそれを嬉しそうに、それから少し寂しそうに受けた。母に甘えるように。

頭上に掲げられた鉱石は、倒れている俺の頭部めがけて振り降ろされ……る、コトはなかった。

「く、くすぐりたい！」

コボルト達は何を考えているのか、各々自分の胸ポケットから鉱石を取り出し、俺のポケットというポケットにそれを詰め込み始めた。入り切らなくてもお構いなし。ぐいぐいと無理矢理に詰め込み続ける。

……まさか、圧死狙いか？ 陰湿な殺し方を！ しかし、この程度の重量で俺を殺せると思うなよ。伊達に、ストレングスをあげちゃいないんだぞ！

今こそ、ストレングス上昇の成果を見せる時。

そう確信した俺は、腕にぐっと力を込め、上半身を起こそうとしたが……。

「ぐえ！」

それを阻止するように、鉱石を詰め込み終わったコボルト達は背中のにのしかかってきた。

「そいつらは一番上質な鉱石を胸ポケットに入れておくんじゃ。子

供のために残す、唯一の財産じゃよ」

お願いする代わりに大事な鉱石をくれるってコトなのか？ だとしても何でこんなに回りくどい渡し方を！

「それを自ら差し出すなどと、よっぽどのコトじゃぞ……」

「おねが、おねが」

「おねが、おねが」

「わかった、わかったから、どいてくれ！ そもそも引き受けないなんて言っていないから！ ぐえ！」

更に重くなったぞ！ 追加で乗ってきたのか！ 頼むからヒトの話は聞いてくれ。『A c c e p t』を押せないじゃないか。

「おねが、おねが」

「おねが、おねが」

だから、そんなをお願いされなくても解ってるって、

「おねが、おねが、ハアハア」

……違った。ヒトの話しを聞かない所は共通してるけれど、増えたのはコボルトじゃなかった。

「おねが、おねが、ハアハア」

いつの間にか母屋へ戻ってきた佐和は当たり前のように俺にのしかかってきて、首もとに腕を回し、息を荒げている。

「何やってんだ！」

ホント、何やってんだ！

「ハアハア、ハアハア」

くそ、とにかく『A c c e p t』を……。

俺は何とか振り払おうと体をひねったが、佐和を落とすには至らなかったようだ。

「がぶーっ！」

「ぎゃー！」

反撃がきた！ 首筋、噛まれた！

「ぽちつと」

佐和は俺が怯んだ隙に、『A c c e p t』を押し、コボルト達が

らの頼みを受諾した。

「ありが、ありが」

「ありが、ありが」

「じとと、じとと」

「じとと、じとと」

コボルト達は佐和に感謝の眼差しを、俺にはじつとりとした失望の眼差しをそれぞれ送りつける。

いや、だから、さっきから請けないなんて一言も言っていないのに！ 受諾、押そうとしてたのに！

「ほら、ヨシムネ。遊んでないで、立って？」

コイツ！ 自分でジャマしておいて何という言い草だ！

一言抗議しようと跳ね起きた俺は思わず声を失った。目の前には修羅がいた。

「佐和、ちよつとクモ、コレでブン殴るから」

ええええ、佐和さんコワイ！ どうしたんですか！？

「ガルルルル」

佐和はコメカミに青筋を浮かべ、オノを手のヒラにとんとんとしている。

イヤなコトか、腹が立つコトでもあったんだろうか。どうせまた子コボルトに逃げられたとかその程度のもんなんだろうけど……。それにしても、キゲン悪すぎだろ。

これは末期だ。爆発にリーチかかっている状態だぞ。扱いを間違えると『グサツ』とか『めきよつ』とイカれる。何度も覚えがあるからわかるのさ！

ココは慎重に言葉を選んで、できることなら無傷で出発を……。

「あの、佐和さん？」

「がぶー！」

選択をミスつたらしい。出発前からすでに手負いとは。自動回復するんだけど、何となく幸先不安だ。

大人のコボルトは全部で五匹。実際同行するのはそのうちの三匹だけらしい。

残りの二匹にお別れをしている場面から予想するに、着いてくるのがオスで残っているのがメスなんだろう。

「いこう、いこう」

お別れが済み、おっさんから譲ってもらったピッチフォークで武装したコボルトが言った。

「ああ、行こうか」

「ハアハア、ハアハア」

こうして俺は何故か鼻息が荒い佐和に手を引かれ、コボルト達と共に農場を後にした。

全員無事に、再びココに戻ってこれるよう祈りながら。

その8

「佐和！ 右だ！」

俺の声に反応して佐和がオノを振り抜く。

「ふッ！」

ギュチュッ！ という断末魔が辺りに響き、佐和に飛びかかったクモが両断される。オノに裂かれたクモの断面からは体液が噴き出すコトもなく、ただその場に落ちて動かなくなる。

作り物のような（実際作り物なんだけど）死体は、ゲームであるコトを改めて俺達に実感させる。

その死体の中で不自然に輝く『蜘蛛の牙』。これが戦利品だな。拾っておこう。

コボルト達の案内で俺と佐和は深い森の中に居た。『コー・ファーム』付近とは違い、日光も届かないほどに鬱蒼とした暗い森の中だった。

この奥に鉱山があるという。

暗い森の中はMob（敵対的なNPC）が生活していて、感知範囲に俺達が侵入すると襲ってくるようだ。

森の入口付近では小さいオオカミやらイノシシが襲ってきていたが、奥に進むにつれてソイツらは姿を消し、代わりに大きなクモが多数徘徊するようになっていた。

コボルトが言うには、このクモは鉱山に居る女王クモの子供達らしいが……、1メートルはあるぞ。子供でこのサイズか。女王はどれだけデカインだろうな。

しかし、低レベルクエストの敵だけあって能力自体は低いようだ。俺の鎖盾投げも充分に命中するくらい動きは遅いし、ヘルスも低いようで大抵一発の攻撃で倒せる。

けど、この調子で戦利品を拾っていくとポケットなんてすぐに一

杯になるな。おっさんの所に預けてきた鉱石もあるコトだし荷物袋は必須だろう。

村に戻ったらお店を見てみるとするか。

次々と襲いかかってくる子グモを薙ぎ倒しながら進んでいると敵の数が突然少なくなった。戦利品を持ち運びする心配をしていたのが無駄になるくらいの減少具合だ。

徐々に襲撃は減ってゆき、ついにはただ一匹のMobすらも目に入らなくなった。敵の居城に向かっていているというのに敵が居なくなるなんて……。

（道、あつてるのか？）

ついそんな疑問が頭をよぎるが、コボルト達はズイズイと森の奥へと進んで行く。その足取りに迷いは無い。

（まあ、コボルト達はココ、ホームなんだし間違えるワケないか）
コボルトの先導に従い不気味に静まり返った周囲を警戒しつつ進んでいると、

ぱりっ！ と、何かを踏み砕く感触が足に伝わる。

うっ、すごくイヤな感触だぞ。

確認するのをためらいつつも、仕方無しに足元を見るとそこには……。

骨があつた。

「ホネだー！」

ひいひい、骨だ！ 白骨！ クモに喰われた生き物か！？

予期せぬ死に見舞われたであろう彼のイノチに安らぎあれ……。

「ここだ、ここだ」

ナムナムと哀れな何かを叩く俺の横でコボルト達がそう言った。

あ。着いたのか。

森の奥には切り崩された山があり、そこには坑道の入り口が掘ら

れていた。

所々を木の柱で補強されている坑道。横幅も縦幅もある程度確保されている。体の小さなコボルトだけでなく、人が移動するにも差し支えはないだろう。

鉱石を運ぶトロツコを動かすためと思われる線路が坑道内に続いているが、すでに破壊されていて動きそうにない。

無人の坑道内に照明は無いはずだが青白い光が中から漏れている。ぽっかりと開いた坑道の入り口は、まるで口を開けてエサをじいっと待っているバケモノのようにも見えてくる。

……この奥にクモの女王が居る。

さて、どうしたものか。

相手の強さもわからないし、攻撃方法もわからない。と、なると、慎重にならざるを得ないだろう。

佐和もそれはわかって、

「おまえー！ 出てコイ、コラー！」

ええええ、佐和さん、流石にそれはいかなものかと思えますけどー！
らー、らー、らー……、と佐和の叫びが辺りに虚しくこだまする。

「むー！ 居留守か！ 知ってるぞ、居るの！ わかってるぞ、居るのー！」

佐和は手にしたオノをぶんぶん振り回し、姿見えぬ女王グモを威嚇するが……。当然無反応。

「ブン殴ってやるから、ちよっと待ってるー！」

シビレを切らした佐和はそう言っ、迷いも恐れも無く坑道へ入って行く。

ダメだ。不用意過ぎる。

「オチツケ！ 無謀と勇氣は違うんだぞ、佐和ー！」

わー、わー、わー……、と俺の叫びもこだました。

……。

佐和を制止すべく突き出した右手をそのままに考える。

まあいいか、と。

ここで考えていても答えは出ないしな。さっきの叫びで俺達の到着はバレているだろうし、奥へ進んで行こう。何より下手に止めてまた『がぶー！』とかされてもヤだし。

「ガルルルル」

する。これは止めたら間違いない『がぶー！』ってする。こんな敵の居城の真ん前で無駄にヘルスを減らすのは得策ではない！と、思います。

「ぎりり、ぎりり」

コボルト達もピッチフォークを構え坑道へと入って行く。

その顔は怒りにゆがんでいた。

コボルト達とは短い付き合いだけれど、普段は温厚で優しい性格だというコトくらいはわかる。

その彼らがこんなに怒りに満ちた表情を見せるとは思わなかった。

カタキ、憎し。

そりやそうだ。考えたくないけれど、自分だって大切なヒトが殺されたりしたらきつとこうなる。

けど、その変貌に俺は少なからず衝撃と驚きを覚えたんだ。

俺は歩みを進めた。佐和の背中が見える。

そうだ……。大切なヒトが……。

「ふ、ン、がー！」

佐和は坑道の壁をボコボコとオノで殴っていた。その姿に俺は少なからず衝撃と驚きを覚えたんだ。

「お前、ホント落ち着けー！」

佐和を羽交い締めにして止める。お前ちょっと荒ぶり過ぎだろ。

中に入ってわかったけれど、坑道内を照らしていた青白い光はコケが発していたものだった。

名前もそのまま『アカリゴケ』って言うらしい。

このコケ、ポーションか何かの材料になるようでそこそこの需要があるとか。コボルト達も時々このコケを瓶に詰めて売ったりしていたようだ。

しかし、照明を気にしなくていいのはありがたい。コケ、サマサマだ。

俺の鎖盾も佐和のオノも両手じゃないと使えない武器だ。片手を照明道具に使つてると攻撃もできないからな。

奇襲に備え鎖盾を構えつつ、コケの発する灯りを頼りにして坑道内を進んでいく。線路を敷くために地面は慣らされているので、足場は悪くない。もっとゴツゴツとした足場を予想していたからコレはウレシイぞ。

そんなコトを思いながら進んでいると、Y字の別れ道に差し掛かった。

片方が『アタリ』で、片方が『ハズレ』だよな。

女王が居る方が『ハズレ』で、居ない方が『アタリ』だ。

今までプレイしたゲームだと、ダンジョンの別れ道のボスが居ない方には宝箱とか置いてあったりするんだ。それこそ正しく『アタリ』だろう！

……。まあ鉱山に宝箱なんてあるワケないか。おとなしく女王を目指そう。

「クモ、どっちかわかるか？」

一応、コボルト達に訪ねてみる。

「しらん、しらん」

ヒントも無しか。うーん。ドツチに行くかな。

そう言えばどこかで聞いたコトがある。迷路っていうのは右の壁面沿いに進むとゴールに辿り着けるそうだ。全く参考にはならないだろうけど、右へ進むコトにしてみよう。

別れ道を右へと入りそのまま道なりに進んで行くと、直線だった坑道は緩いカーブに変化し、その奥から一際強い光が漏れ出ていた。その光を遮って不自然な影ができている。目を凝らして確認すると、

影の主は四角い車輪付きの箱だった。

トロッコか。どうやら線路の終点みたいだな。

乱雑に鉱石が積み込まれた古っぱい木製のトロッコを横目に、そのまま歩を進めるとぼつかりと開いた部屋へと出た。

アカリゴケが群生し、思わず目を細めてしまうほど明るい。天井も高く、幅も今までの通路とは比べ物にならないほどの広さだ。その部屋の壁際の所々にはツルハシやら一輪車が置いてある。ここで採掘していたんだろうか。

しかし……。居ないなあ。女王どころか鉱山までの道中に襲って来た子グモ一匹すらも居ない。

何処かにクモの痕跡が無いものかと全員で手分けして部屋の中を探索するが、糸の一本も見当たらなかった。

「居ないなあ」

「むー！ カクレチキンクモめ！」

さっきの道、左だったかな。仕方無い。戻るとするか。

『迷わない方法』ってシラミ潰しなだけですよね。いつかはゴールに辿り着けるって意味じゃ間違いないケド。

別れ道まで戻ろうと部屋から通路へ出た俺はコボルト達がついて来ていないコトに気が付いた。

「おい。次、行こう」

部屋の奥で壁面をペタペタと触れて調べていたコボルト達に声をかける。

「わかた、わかた」

三匹のコボルトが俺達の方へ向かって歩き始めた、その時。

コボルト達の頭上に濃い影がかかる。

これは……。

「上え！」

「わわわ、わわわ」

思わず出た俺の叫び声に驚き、コボルト達はその場から再び部屋の奥へと飛び退いた。

ドガンツ！ と爆発にも似た音が坑道内に響き渡りそれと同時に地面が揺れる。

間一髪だ。ついさっきまでコボルト達が居た場所に巨大な黒い塊が落下していた。塊はそのままモゾモゾと動きだして俺達の方へと向き直る。

生き物だ。こんな状況で現れる生き物なんてアレしか思いつかない。

全身を包む黒い産毛に八本の脚の先にある鋭い爪。八つの黄色い瞳は四つづつ、上下二列に並んでいる。

「女王グモ……！」

デカイ。3メートル？ 4メートル？ とにかく、子グモなんて比較にならないぞ！

（通路を通れるデカさじゃない！ どこかに抜け穴があったんだ！）

「ヨシムネ！ いっぱい！」

佐和が天井を指差す。天井からは大量の子グモが這い出て来ていた。

ワシャ、ワシャと不快な音を鳴らす無数の小さな影が波打つように蠢き、コボルト達を包囲していく。コボルト達はそれを迎え討つようにピッチフォークを構えた。

女王の向こう側にコボルト達。くそ、完全に分断された！

『包囲された彼らに逃げ場は無い。寡婦の女王を倒して彼らを救うのだ』

目の前に表示される一文。ご親切にもボス戦開始の合図か。となれば、先手必勝。

「はっ！」

俺は鎖の部分をしっかりと握り、盾を女王に向かって投げつけた。

円形の盾が空を切り飛ぶ。ドツ、と女王の体に盾がめり込む……が……。あまりにもか細い打撃音。

（あんまり効いてない？ 俺のスキルが低いからか！？）

違う。子グモを相手にした時とは明らかに違う感触だ。コイツは打撃に耐性があるのかもしれない。

鎖を思い切り引つ張り手元に盾を戻す。けど、この攻撃じゃ何度やっても倒せるかどうか……。

「ヨシムネ！ 佐和がブった斬る！」

佐和のオノならいけるか？ 俺と佐和は顔をあわせて互いに頷き、行動を開始した。

俺は眼を狙い再び盾を女王へと投げつける。佐和は俺の動きに紛れて女王の横へと回り込んだ。

盾が女王の眼前に迫るが、ギン！ と金属を叩く音。女王は前脚で盾を叩き落としていた。

（当たらなくても別にイイ！ 気をコツチにそらせられば！）

首尾、上々！ 佐和！ ぶった斬っちまえ！

「ふッ！」

女王の横へ回り込んでいた佐和が脚の一本に狙いを定め、オノを思い切り振り下ろした。

ゴッ！ と鈍い音に続いて、ボギッ、と枝をへし折る様な音と、

更に続く女王の悲鳴。

人生で始めて聞くクモの悲鳴だ。黒板を爪で引つ掻いた様な、マイクのハウリングの様な高い悲鳴。

その悲鳴が意味するものは……。

「やったよ！」

佐和がやった！

佐和の振り下ろしたオノは女王の脚の一本を節のあたりから見事に切り落としていた。その断面から緑の体液が流れ出す。

これは血か……？ 子グモからは流れなかったぞ。

大型のボスは部位破壊があるのかもしれない……けど、それは後

回した。

女王が薙ぎ払うように脚を振った。

反撃が来る！ その矛先は！

「佐和あ！」

俺は佐和に向かって駆け出した。

「ぎゃん！」

女王の攻撃をモロに受けた佐和が吹っ飛ばされる。衝撃で手放してしまったのかオノが宙を舞った。

壁に叩きつけられるであろう勢いで飛ばされる佐和を背中から抱きとめたが、その勢いを完全に殺す事はできず地面を擦りながら壁際に追い詰められる。

「佐和！」

「ふっ、あ……」

呼びかけつつ佐和を揺さぶると、腕の中で佐和が呻いた。

痛みはないはずだ！ けど、昏倒？ 状態異常の一つか？

当然、佐和の目覚めを女王は待ってくれるハズもなく、俺達の頭上で前脚を振り上げた。

「く、そ！」

佐和を抱き締めて飛ぶ。轟音と共に地面が揺れた。

鋭い一撃だった。食らったら一溜まりも無いだろうけれど何とかかわした！

かわした……けど……。

昏倒したままの佐和を寝かせて、かばう様に前に立ち考える。

（どうする？ どうする？ どうする！ どうする！）

俺の攻撃じゃきつと倒せない。もう一度さつきみたいに俺が引きつけて佐和が攻撃するしかない。

「はっ！」

女王の注意を引きつけるために盾を投げつける。

ダメージが入らなくてもいい。とにかく佐和が目覚めるまで時間を稼ぐんだ。

しかし、盾から手応えが伝わってくるコトは無かった。
アレツ？ ハズした？

もう一度、今度はしっかりと狙いを定めて……投げる！

今度はバツチリ。会心の一投だ。盾は、ギョオ！ と風を切つて
女王の顔目掛けて一直線。

女王に当る……直前で鎖が伸び切った。びん、と張られた鎖は盾
の動きを止める枷となり、虚しく地面に落下させる。

これは、違う。当たってないじゃない。ハズしているわけじゃない。
い。

届いて、いない。

後、一步、二歩でも前に出れば射程内だ。

(前に出る！ 前に……)

なのに。

目が眩む。足が前に出ない。

さっきの一撃のせいかな？ 最悪なタイミングでぶり返した。死ぬ
コトに、ビビってる。

リユリユさんは死んでも復活するから平気って教えてくれた。

けどそれって『大丈夫。ココ、すごく高いけれど安全だから、安
心して飛び降りてみて？』って言われるのと一緒にだろ？ そんなコ
ト言われても怖いんだよ。

……ぶり返したとか、ウソつくな。

最初からだろ？ 気付かない振りしてたダケでずっとビビってた
んじゃないのか？

鎖盾での攻撃だって、アイツに耐性があつたわけじゃなくて、俺
の腰が引けてたんじゃないのか？

そうだ。

森の入り口にいた雑魚相手には何ともなかったんだ。あいつ等を相手に、もう少し慣れてからリベンジすればいいじゃないか。万人がクエストを成功してるワケじゃない。こうして、失敗するコトだつてあるんだ。

諦めたワケじゃない。戻って、鍛え直して、必ず、また……。

そうだ、そうだよ。佐和だって目を覚まさないし、目覚めたとしてもオノは失った。

劣勢なんだ。今ならまだ佐和を抱えて逃げ出せる。勇気と無謀は違うんだ。

逃げる理由を必死に考えて納得しようとする俺の視界に、果敢に戦っているコボルト達が映る。

ゴメンな、俺、弱くって。悔しいだろうなあ。仇討ちに來たのに返り討ちにあつて、仲間もホームも蹂躪されて。

……俺達が逃げたら、あいつらは食べられるのかな。

でも復活するんだろうな。NPCなんだし。農場に行けば何事もなかったように『次はがんばろうね』なんてコト言つて……。

だから、きつと大丈夫。このゲームはそうしてイロシナトコロでこうやって、まわってるんだ。

絶対に次こそは……。

俺の視線に気付いたのか、コボルトの口が動いた。

……。

ああ、なんて、言つた？

ため息が出る。

『いいよ、にげて』

そうだよ。こんなのたかがゲームなんだから、そんなにココロを痛めるコト、無いじゃないか。

プレイヤーは死んでも復活するという。それはNPCだって同じコトなんだろう。

同じコト、同じコト、同じコト……。同じコト……か。

死んで、生き返って。生き返ったあいつらは、また同じあいつらか？

元の肉体の無いあいつらはどうやって生き返る？

ゲームのデータの中からロードされる？

それは本当に同じ体験を共有した、あいつらか？

同じ皿のカヴォチャ取り合って、話を聞けっていったのに聞きやしないで大事な鉱石ポケットに詰め込んできて、……農場で奥さんと子供が待つてて……。

『全員無事に、再びココに』

それはいま目の前にいるあいつらのコトだったハズだ。

とか、笑える。

たかがゲームにそんな風に考える必要なんて無いんだよ。

たかが、ゲームだぞ。

そうだ。こんなのたかがゲームなんだよ。

笑える。

たかがゲームにも本気になれないで、どーすんだ！

俺は盾を前に構えて思い切り地面を蹴った。

「おっ、りゃああー！」

おお、叫ぶと結構イイ。勇敢になった気がする。勇敢になれた気がする。

女王は俺に狙いを定め、脚を振り上げる。その姿は死神が魂を刈り取るために待ち構えているようにも見えた。けど、もう引けない。ヒュッ、と風を切る音が聞こえる。女王が脚を振り下ろした音だ。女王の狙いは完璧だった。

駆け込む俺の頭に当たる見事なタイミング。
頭上に爪が迫る。

（目を閉じるな！ 逸らすな！）

姿勢を低くして、盾を頭上にかざす。

コッ、とノックするような音が耳に届いた。軽く聞こえたこの音は一步違えば俺の命を刈り取ったハズの音だ。盾で受け止めるコトができたのは奇跡としか言い様がない。

（止まるな！ 止まるな！ 止まるな！ ただ、前に！）

それもプラスに働いた。止まっていたら、爪は盾を貫通してそのまま俺の頭を砕いていたかもしれない。

キキキキキッ！ 不快な音を響かせながら火花が散る。直径50センチほどの小さな盾。その上を女王の鋭い爪が走り滑る時間は長く、長く感じた。

くそ、怖い怖い怖い！

こんなの普通に接近戦仕掛けた佐和さん、スゲエ！

こんなの相手にカタキ討ち考えたコボルト達の勇氣には脱帽だ！
できましたら、帰り道くらいは俺も皆さんと肩を並べて歩かせて
いただきたい！

だから、前に！

完璧に受け流したハズなのに体が半身弾かれてバランスが崩れる。

ヘルスも減ってっている。スキルが関係してるのか？

（そんなの、知るか！ いいから、このまま……！）

半身弾かれた勢いをそのままに一回転し、女王の懷に潜り込む。その勇気は俺に二つのチャンスを与えた。

一つはビビリ挽回のチャンス。

もう一つはもつと戦術的なチャンスだ。

飛び込んだ先にあるのは無防備な女王の顔だった。女王の顔が驚きとも憎しみともとれる風に歪む。

「おおっ！ りゃあああ！」

ぶ・ん・な・ぐ・る！

ゴッ！ と、盾が変形するほど強烈な打撃を見舞わせる。会心の手応えだ。

女王が悲鳴と共に体を跳ねあげた。トトツ、と地面に緑の体液が滴り落ちる。

何が打撃に耐性だ。みるよ！ スッゲエ効いてるじゃないか！

考える前にやってみろってんだ！

（まだ止まるな、もつと前に！）

狙いは女王の体の下！ 腹の下だ！ 『アレ』があそこにあるんだよ！

跳ね上がった女王の腹の下に鈍く光る真つ赤なオノ。佐和のオノだ。

（アレを！ アレを佐和に！）

使い物にならなくなった盾を投げ捨ててオノに飛びかかる。滑り込んでオノを拾い上げ横転し、戻ってくる女王の体を回避する。

（よし、取った！ 後は、これを！）

ずん、と頭の芯まで響く振動と共に女王の体が地面へと戻る。

けど、まだ万全じゃない。

（攻撃体勢を取るまでにはまだ間がある！ いける！）

体勢を完全に立て直される前に、脚の隙間を狙ってオノを地面に滑らせる。

オノがねずみ花火の様に勢いよく回転しながら女王の体の下をくぐり、佐和の居る方へ向かっていく。

（佐和に……）

……キーン、と耳障りな金属音が響いた。

耳障りに決まってる。それは女王が地面を滑って行くオノの進路を脚で遮った音だったんだから。

オノの回転は女王の爪先によって止められ、地面へと釘付けにされていた。

止められた。頭のイイヤつだ。

もしかして体勢の立て直しに、もたついてたのも俺のオノ投げパス待ちだったのか？

……イヤなやつだ。

もう一度言わせてもらう。本当にイヤなやつだ。初級ボスがそんなトリッキーな動きすんじゃないやねえよ！

（……これで……）

そうだ。もうこれで俺に出来るコトは何もない。盾も壊れたし、逃げ場も無い。ヘルスだってガリガリ削られてもう残り少ない。

でも大事なモノは守った、と思いたい。

驕る女王は脚で薙ぎ払う。防御する術もなく、回避する場所もなく俺の体は思う様に吹っ飛ばされる。

直撃だった。普通のゲームでいう所の『痛恨の一撃』ってトコか。俺はそのまま壁に叩きつけられて……。

目の前が深く、白く、輝いた。

「グッウ！」

痛くは無い。痛くは無いのに、つい漏れる、呻き。ヘルスがゼロになったのか、体が動かない。急激な眠気が襲ってくる。

（終わりかな……）

死、か。どうなるんだろ？ 並んで帰るのはムリなのかなあ。

そんな俺を見つめて、女王の顔が再び歪んだ。さっきのとは違う

歪み方だった。

そうだ。その表情はまさに『笑み』。

もしかして、それって勝ちを確信した笑みか？

トコロでさ。俺、何かに紛れて何かを何とかそういう小手先なずうずうしいの、スキなんだ。

例えば、例えばね？ オノを地面に滑らせておいて、本当に渡したかったモノをこっそり投げ渡すとか。そのためにわざと大げさにオノが大事ですアピールしてみたりして。

お前は知ってただろ？

『どこでもイイからそれ、ぶっ刺しちまえ』。

くそ、声が出ない。

ぼやけ始めた俺の視線の先には、目を覚ました佐和が立っていた。その手には佐和が斬り落とした鋭い爪を持つ女王の脚がある。

「ヨシムネ。チガウ」

佐和は手にしたクモの脚をくるりと回し、持ち直す。そのまま切断された節の方をぎゅっと握りしめ、爪を刃にみたててヒュッと素振りをした。

「佐和は、殴ったり、斬ったりの方が、トクイ」

どうだ？ 女王サマ。俺の大事な幼馴染はヘタレな俺と違ってオトコマエだろ？

「おまえー！ イロイロ、なんてコトしてくれたかー！」

閉じてゆく俺の瞳に最後に映ったのは、クエスト開始前の宣言通りに、怒号を飛ばして女王グモの顔をブン殴る佐和の姿だった。

佐和さん、エグい。そこ多分さっき俺がぶん殴ったトコと同じトコだ。

女王の断末魔が響く。耳障りな子守唄を聞きながら俺の意識はそこで途絶えた。

さっき女王が笑った様に、俺もきつと笑ってる。

結局、最後まで佐和頼りか。

……最高に情けないけど、

やった、って言ってるイイのかな？

その9

「おー！ 似合うじゃない！ カッコいいわよー！」

酒場の一席でミラさんが俺達の一新された装備を見て褒めちぎった。その言葉にリユリユさんもコクコクと頷く。

辛うじてクエストを達成した俺達は、報酬である謎の鉱石『コボルタイト』の他に女王の死体から『毒婦の爪』と『女王のシルク』を手に入れた。雑魚相手からも『クモの爪』を多数入手している。その上、おっさんと奥さんは切った『カヴオチャ』をお土産に持たせてくれた。

スキルも上がり、レベルもあがり、がっばがっば、げっはげっは、うっはうっはだ。

『コー・ファーム』のおっさんは鍛冶の心得もあつたらしく『コボルタイト』をプレートアーマーと新しい盾に加工してくれた。

鈍色のプレートアーマーに、でかくて平べったい長方形の盾だ。モチロン、鎖付き。残念ながら盾は重くなって射程距離も短くなつてしまったが、その分強度と防御性能は格段に増したからヨシしよう。

なんだか一回死んだら吹っ切れた。今度こそはちゃんと佐和の盾になるぞ！

当の佐和は農場の奥さんに『クモの爪』を『女王のシルク』で繋ぎ止めてシルクのアーマーにしてもらったようだ。軽装鎧の一種らしい。

モロ接近戦なんだし、重装鎧の方がイイんじゃないのか？ と俺が尋ねると、佐和は『そんなに重そうな鎧着て攻撃、遅くて動きにくくて、超不便』と言った。

もしかしたら俺に防御力の高い鎧を譲る方便だったのかもしれないが……。盾になる決心をした俺には丁度イイ。佐和のサポートを

がんばるぞ。

村に戻ったら買おうと思っていたカバンも『女王のシルク』の残り、農場にあった頑丈な布で奥さんが作ってくれた。

ありがたいコトだ。

『毒婦の爪』はおっさん達では加工する技術が無いと言うコトなので、カバンで眠らせておくコトにした。いつか役に立つ時がくるだろう。

「いやー、どうなるかと思ったけど、無事戻ってきてくれてよかったわ」

ミラさんはすっかりと生まれ変わった姿の俺達から目が離せないようだ。

そう。その熱を帯びた眼差しはまさに、

「……イイスギ」

佐和がそう言いながら俺の首元に回した手に力を込めた。確かに言い過ぎでした。

「しかし、今日は一段と仲イイわね」

そうなんだ。先日のクエスト以来、佐和がくつついて離れない。家でも学校でもゲーム内でもずっと引っ付きっぱなしだ。

「よよよ……」

「はぁ。どうやら俺が目の前で死んだのがショックだったらしくて心配されるのは別に悪い気はしないんだけど……」

……。

死んだ俺を待っていたのは心地よい浮遊感と眠りだった。

ほわほわと天にも昇る絹の眠りだ。しかし、このまま身を委ねておくワケにはいかない。

何とか復活せねばと、重いまぶたをこじ開ける。

俺が目を開けるとそこは森の中のお墓だった。

いつもと違うコトと言えば『色が無い』。灰色の世界だ。自分自身の体も心なしに透けている。幽体ってコトなのかな。

そんな俺の目の前を純白の翼をはやした天使が退屈そうな顔でぶかぶかと浮いていた。愛嬌のある中性的な顔だちの天使だった。

その天使が目覚めた俺に気づき、満面の笑顔をみせて言った。

「あつ！ クズ野郎さんいらっしやい！ 自力復活が不可能な場所で死んだドマヌケな方は、自力復活よりも多いペナルティを支払ってこの場での復活が可能ですよ！」

なるほど。救済処置か。

「自力で復活を希望される方は無様にも生き絶えた場所まで走って行ってタマシイと肉体をリンクさせてくださいね！ 少し時間がかかるかもしれませんが、自分が死んだのが悪いんですからガマンするのは当然ですよ！ それにしてもその程度で戻るイノチなんて、やっすいイノチですね！ カメモシ以下にはお似合いですよ！ ぶっ」

……。

今回は戻れる場所なので自力で復活をしましょう。佐和も心配しているだろうし、早速向かうとしようか。

そう思っって一步を踏み出した俺を天使が呼び止めたんだ。

「あつ！ 待って！ …… べ、別にまた来てくれてもイイんだからね！」

二度と来るか。

迷子にならないかどうかだけが心配だったが、移動を開始すると頭の中にコンパスが描き出され、死体の方角を指し示してくれた。
(これなら迷うコトも無いな！。よかった、よかった)

距離的にもそう遠くない。どうやら各地に点在するお墓が幽体のスポンポイントになっているらしいが、その中でも死んだ場所から最寄りのお墓に飛ばされるようだ。

森の中をしばらく頭の中のコンパスに沿って移動していると、鉱山の入り口を見つけた。ここまで来ればもうすぐ到着だ。

坑道内をふわふわと移動し、死体の位置まで戻ってみるとそこには……。

「よよよ……」

そこいらにあったツルハシで俺の墓穴を掘る佐和の姿が！ 正気か、コイツ！

「よよよ、よよよ」

「よよよ、よよよ」

コボルト達も佐和を囲み怪しい踊りを舞いつつ、何かをつぶやいている。

祈り！？ 弔いの祈りか！？ 成仏させるつもりか！？ 急いで復活しないと！

タマシイを体にリンクか。やり方もわからないので取りあえず幽体を肉体に重ねてみる。

すうっと、体に入り込んでいくカンジがするぞ。やり方はこれであってそうだ。時間がかかると言っていたから後は待つだけだな。

だが、こうしている間にも俺の体は着々と大地へと（強制的に）還らせられようとしている。

「よよよ……」

悲しみにくれる佐和の手で埋められていく俺の体。

「そららー！ そららー！」

「なむむー！ なむむー！」

マズい。アイツら超盛り上がってる。コボルトどもの祈りもクライマックスだ。

急げ、急げ、急げ。

「あいむ、ばーっく！」

見事復活を遂げた俺は、埋まった半身を必死でひねって穴から這い出た。

「いろんな意味で危なかった……」

「ヨシムネの、オバケだー！」

「なむむー！ なむむー！」

「ヘタレー！ ヘタレー！」

カムバックした俺に向けられる暖かい出迎え。みんなの優しさが胸に染みる。

俺もそれなりの返礼をせねば。

「フハハー！ ゾンビだぞー！」

「……ヨシムネ、佐和バカにしてる？」

「ないわー、ないわー」

「ないわー、ないわー」

コイツら……。

わなわなと怒りに震える俺の体に衝撃が走った。

「ぐお！」

思い切り佐和が飛びついてきた、その衝撃だった。勢いに負けて後ろの墓穴にカムバックしそうになるのを踏ん張って堪える。

「おかえり。うー……おかえり……」

……よかった。逃げなくてホントよかった。勇気を出して死んでよかった。死んだ方がマシってこういう時も使ってイイのかな？

「ゴメンね、佐和守ってあげられなくてー！ もう、離さないからねー！」

嗚咽を漏らしながら叫ぶ佐和だったが、我を忘れているせいか締め付けが激しい。

「すいませんが佐和さん、少しユルめていただけませんか？」

ぎぎぎ……。ぎぎぎ……。

復活直後のヘルスは最大値の二割程度らしく、戦場等危険地帯で復活した場合は即何らかの手段で回復しなければレスキル（復活直後の弱ったトコロを狙い殺す行為）され、五分と持たず再び天使に

出会うコトもあるとか。

例えば、今の俺のように。

二分後、俺は二度と会うまいと誓った天使と早速再会するコトになる。

その後、なんとか復活を遂げた俺に佐和が再びしがみついて来て離れない。

そこまではよくあるようなコトだったんだが……。

その10

無様ながらもクエストを成功させた僅かな達成感を胸に、ヨシムネと佐和は家路に着いた。

アミューズメント施設『00』のカラフルなネオンの見送りを背に繁華街を抜けて、そのまましばらく歩くと住宅街へと入る。雑多と喧騒が遠のいたネオンの光も届かない住宅街。

そこでは目に痛いカラフルなネオンに代わり、家庭から漏れるあかりが二人を出迎えた。

少し遅めの夕餉をとる家庭の暖かい光と、家族の笑い声。空腹を誘う匂いも漂ってくる。

しかし、二人を出迎えたのはそれだけではなかった。

目的地の自宅、その隣家である香月家の二階の屋根の上から二人に視線が向けられている。弾劾する様な視線だった。

視線の主は腹ばいになり屋根の影に身を潜め、金色のオペラグラスを片手に二人を観察している。

少女だった。年の頃十三、四といったところか。

ビー玉の様な目に、鋭い細い眉。幼さを残す輪郭を包む亜麻色の髪は白いネコの髪留めでツーサイドアップにされている。

「ぎぎぎぎぎぎ！ 何よ、あんなにくっ付いて！」

「もう暗いんだし、そんな所登つてると危ないわよー？」

屋根の上に居る少女に向かって室内からたしなめの言葉が向けられる。

「大姉ちゃんもちょっと見てよ！ あの二人やっぱりしでかしてやがつてるわっ！」

「ええー？ 何のコトかしらー？ 大姉ちゃん、ちょっとわかんないなー……」

「え、アッ！？ ウチ入ってこないわよ！？ 隣、行っただー！？」

あいつらなりふり構わずしかすつもりか!? マズい! 先回りよっ!」

ヨシムネと佐和が香月家の前を通り過ぎてヨシムネ宅へ入っているのを認めると少女は隣家の屋根に向かい、飛んだ。

猫の様にしなやかな跳躍だった。

少女は音も無く隣家の瓦屋根に着地し息を潜め、ヨシムネの部屋の中を伺った。

無人である。先回りには成功したようだ。しかし、気を緩める時間はない。

「ムムッ!」

階段を登るトトツという音、それから話し声が少女の耳に届く。すぐに奴らがやってくる、そう確信した少女は猫のように身を丸めて警戒を強めた。

「よよよ……」

「ほら、佐和。もう大丈夫だからな? ウチ帰れ、な?」

部屋の明かりをつけながら言った俺のコトバを佐和は首を振って拒否した。

また死ぬとか……心配しているのかな。ココは現実なんだから、もう心配いらないんだけどなあ。

「俺、お風呂入りたいんだけど……」

ため息をつきながら俺がそう言つと部屋の窓が、ガタタ! と揺れた。

「おふおおおおろおおお!」

突然の叫び声に思わず窓へと顔を向ける。とても残念なコトに、聞き覚えのある声だった。

「う、ううっ……」

佐和もその声に反応し、顔を強張らせる。

窓に少女の姿が映った。窓をカリカリと引つ掻き、ガタタ、ガタタとこじ開けようと必死だ。

外からじゃ開けられないんだよ。カギかかってるからな！

苛立たしさが最高潮に達したのか、少女はイヨイヨ最後の手段に出た。

「ムキーツ！」

ばん！ ばん！

ヤメテ、叩かないでください。サルじゃないんだから！

このままでは割られかねないので仕方なくカギを開けると、少女は勢いよく窓を開け、俺に向かい吐き捨てた。

「このヘンタイ！」

ええええ、いきなりヘンタイ呼ばわりされるとは……。

「あわわ、帰ってきた……。帰ってきた……」

窓から遠慮なくズカズカと入ってくる少女の姿を見た佐和が嫌そうに言う。

佐和、そんな嫌そうにするなよ。……お前の家族なんだしさ。

「お帰り、智奈」

俺がそう言うのと智奈はハナをふん、と鳴らして佐和を睨んだ。

「あわわ……」

「智奈達が帰ってきたからには、お姉ちゃん自由にはもうさせないんだからね！」

「あわわ、帰ってきた、帰ってきた……」

突然の来訪者に取り乱す佐和。何とか落ち着けないと。

「佐和？ ちょっと落ちつ」

「がぶー！」

意味もわからず、有無も言わず首すじに激痛！

「ぎゃあああああ！」

痛い！ 何で！？ ココ、現実！ 滅茶苦茶痛い！

「ヤメロ！ 佐和！ 落ちつ」

「がぶー！」

さらに食い込む佐和の噛みつきに耐えるコトなんてできず、月夜に俺の悲鳴がコダマした。

「おつ、大姉ちゃんも、実は大姉ちゃんも、帰って来てるのよー」
ウチの玄関の前でぴょんぴょんと、飛び跳ねながら主張するもう一人の来訪者に俺達が気付くのはもうしばらく後のコトだった。

二人のコトは一先ず置いておくとしよう。ゲームには関係無いし。……無いよね？

「死……？」

ミラさんが眉をひそめ、首を傾げた。
お叱りでしょうか。あんな初級クエストで生き絶えた俺にお怒りでしょうか。

「クエストってランダム性があるけど、初級でそんなに危険なコトがあるなんて聞いたコト無いなあ」

「え」

「ちなみに私とリユリユがヤツタ時は『農具を作るために鉱山のコボルトから鉱石をお裾分けしてもらっ』だったわ。鉱山まで行って、鉱石もらってファームに戻って終わり」

ええええ、何その格差社会！NPCの配置も難易度も全然違うじゃないですか！

「大体、寡婦の女王って初級とはいえ一応インスタンスの中ボスよ？」

「インスタンス？」

「占有エリアのコトよ。ダンジョンの場合はグループ単位での入場になるから他のプレイヤーに邪魔されずに攻略ができるようになった」

ているわ。他にも混雑するようなエリアは自動でインスタンス化するようになってるわよ。例えば……、そうね、町の中だと酒場とか宿屋とか。混雑すると、円滑なゲームプレイなんて望めないし、人を分散させるための処置ってトコ」

「なるほど……」

ん？　じゃあその隔離されているハズのダンジョンエリアからあのクモの女王は出てきたってコト？

「まあ、バグってたのかもしれないし……。無事帰って来れたってコトでヨシとしましょうか」

腑に落ちないけれど……。ああ、そういえば女王で思い出した。

「あつ、そうだ。それから聞きたいコトがあつたんです」

「うん？」

「盾って受け流してもダメージ食らうんですか？」

「あー。盾って効果が二種類あつて……」

俺の質問にミラさんは丁寧に答えてくれた。

『盾について』

盾には二種類の効果がある。

一つは『完全にダメージを受け流す』効果。もう一つは『盾で受けたダメージを軽減する』効果。

受け流すには『受け流し』のスキルが、受けたダメージを軽減するには『盾』のスキルが必要になる。

『受け流し』の効果はスキル値と盾の性能で発動確率が上下する。

『ダメージ軽減』の効果は盾で受けてさえしまえば確実に発動する。

『盾』のスキルは『受け流し』の確率にボーナスを与える。

「受けたけどヘルスがガリガリ削れたつてのはスキルが低いからね。『ダメージ軽減』の方の効果は出てきたハズだから直撃に比べたら幾分かマシだったろうけれど」

あれで軽減されてたのか。そのワリには痛かった。流石、中ボスだ。よく勝てたな……。

「『受け流し』の方は100%発動じゃないからアテにしてないヒトも多いわよ。それと同じくらい『受け流し』に助けられたコトがあるヒトもいるけどね」

ふーむ。俺も『受け流し』は発動したらラッキー、くらいに考えて『盾』のスキルをしっかりと上げておくとしよう。

「よくわかりました。ありがとうございます」

ミラさんにお礼を言って『さあ、今日は何をしようか』なんて会話をはじめた途端、酒場の入り口がにわかに騒がしくなった。

誰かが駆け込んできたようだ。

「ハア、ハア……」

息を荒げて酒場に転がり込んできたのは、大きな麻袋を抱えた太り気味の男だった。

その男は呼吸を整えると、酒場中のプレイヤーに向かって叫んだ。
んだ。

「たっ、助けてください!」

……はい?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4470y/>

あらいぶ ～ぼくらは知性に恋をする～

2011年12月16日18時57分発行